和訓栞

安之部

二

和書門	
類	
二一六五一	號
八〇	函
一	架
八二	冊

內閣文庫	
和書	
二一六五一	號
八二	冊
二六二	函
三	架

內閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (2)
函號	263 10

国立公文書館
National Archives of Japan

神宮文庫
教部省文庫印

倭訓栞前編二

阿の部

洞津　谷川士清　纂

あ　およそ聲音は基なり根さす所なるゆえに法は法なり語は音を含め
るなり仲氏もいわく口一開則千声萬音可以次喚出耳といえり　大日經疏
は阿字は是一切法教之本凡最初開口之音皆有阿声若離阿声則凡无一切
言説故為衆声之母とあり今をは著しきことなるべし○万葉集
嗚呼霊異記は噫新撰字鏡は嗟とあり今あとよむ語は青は
なり所謂長呼短呼乃別也○あるはあべりはあるは有と畧しいう也
○夫吾足畔をとあるハ皆畧語なり○答への辞はいふ禁秘抄は女官
やすらはるるはるるせいりん女房のことばとあり集韻は阿慢應之声とい
へり○魏晉已来は語は阿といふ多し阿師阿母阿兄阿妹乃類なり人と
ふ紘声とす○日本紀は鞍馬阿の假字は用
ふあ　神武紀の可ようくしやと古事記はあくしやこしやと云ふ私記はあく

と咲聲也とゐてあり○嗚呼噫嘻吁嗟於戲於乎烏乎猗嗟嗟夫嗟乎叱嗟嗟嗟乎嗟嗟とあり法世於戲を嘆美に用ゐ嗚呼を哀傷に用ゐハ古法に背かりといふ漢武紀の嗚虖孔光傳に於虖五行志に嗚嘑皆通用す小爾雅に烏呼吁嗟也吁嗟嗚呼也有所嘆美有所傷痛隨事有義也とゐゆ老學菴筆記に蜀人見人物之可誇者則曰嗚呼可鄙者則曰噫嘻こいひ字彙に烏見異則噪故以為烏呼嘆所異也とゐいひ司馬遷傳に注に於讀曰嗚戲讀曰呼といひ嘻通して譆に作る猗與も同じ猗字語尾の助辭となる行大學に泰誓を引て兮字に作る字彙に嗟ハ悲嘆之声と注せり詩經乃注に猗者心内不平嗟是心中喑啞ともいふ○九二字ハ意緩也一字ハ意急也其一字ハ於嗚噫嗟咨嘻都吁呼猷噬羌慶緊猗の類ハ漢書師古の注に慶猗語讀與羌同といふ又悪唉とゐあり驚嘆ハ泥なり孟子ハ朱註に悪平声歎辭也とゐゆ粤とゐハ猗語に思惟一ていひ出る辭なりといふ○源氏に耳もおぶくしかりけるかくふるてわるうといふハ老人ハ体也緑児ハ啼声多に典紫式部日記に

△あい　魏志倭人傳に對應聲曰噫比如然諾とゐてこゑ字彙に矣慢應ともいふ○畿内にもいと云ひて同韻通也

あいく　たゐてこれ家塵書師古の注に今人痛甚則称阿とゐてこゑ○出羽ハ秋田城をあいくといふ韻通すなり日本紀に鰐田に作る倭名鈔に隈ゐてこれ城を見より出といふ

あいたんごろ　赤縄に朝所とあり大内宮にいふ小じ物ゐてゐゆ

△あうん　阿吽ハ音なり○獣にいふハ嘯吼なりといふ

△あえ　日本紀に肖字とあり注に擬也

いろはハ七夕つゆ同じくそなたちぬぶわさハいろえすそつね

源氏物語にたゐてこれ物をあえまぜたること

ゐてこゑ宗紙の法にいろやかにもぬるなりといふ○魚にいろえにり西州にて

あいれうといふ鱗鯪と共ハ俗字なり○業記にきゐもにり間枝なりくし

あえす　松茸紙にちりそぬるめをゐゆ乳ハこゑ物ゐてこれ

わゆるも同語なるべし伊吾物語にも足より血いでたるとも見ゆ あへずと云は
別なり○萬葉集に
百枝さしおふる橘玉にぬく五月を近みあえぬかにさけりけり
又水茎のあえぬかにとよめるもおなじなり 笹ねといふにや 又いはゆる実はあまねきつ
あえもの　貫之家集源氏物語などにみえたり あやかりものといふにこそ
△あを　襖をよめるは桃花蘂葉にみえたり 音の轉せしなるべし 倭名鈔には あを
きしとみえ 襖子は義なり 青梅(アヲメ)も音のあをめなるがごとし 新撰字鏡には襖を
ふすまごろもとよめり○蓑の訓のあをといふも其様素紙にみえたり 神代紀
の青草束より出たる名なるべし 字治拾遺にも見えたり さればあをにと讀むべし
みえたり○倭名鈔に呉服の名に阿桒をよめり
あをし　青をいふ 明(アカラ)小の義しは助詞也○神代紀に青檀城根尊なり口訣
に青は良なりと古語にいふ借字也
あをい　源氏物語にあをにびやあをにびかざみといひ又物語に表白字の
下つかへはあをにびに析りて○とみえたり 木賊(トクサ)色 萠葱(モエギ)色なりといふは

あをしといへり 或は雜丹ぞよめり
あをうま　日本紀に白馬とかけりたりよそ物あて白きは必もあをき色をひとを兼たる
ものなり萬葉集源氏物語などにいひなれたり○白馬の節會は正月七日にありは
あをなり禮記に春は東郊に迎へて青馬七尺を用ふとみえたり 文徳實
錄延喜式等には青馬とかけり 漢語抄に驄は青馬也といへり 新撰字鏡に驄
をあをきさ馬とよみ白色又青色と註せり 又水あをなり 嵐あをなり 駰又騅を
よめり万葉集に
あを色も黑きもあをとよみあをとよむ人あまたりしとみゆ
拾芥抄に建禮門云青馬陣謂之南面儀仗中門とみゆ
あをいろ　源氏にあを色と見えてあをいろとなるは主上の襲の御服麹塵色の
義人称にして袍すと見ゆ 延喜縫殿寮式に青色橡綾と見えたり
あをびえ　神代紀に竹刀とよめり竹は青く刀は鋭やなるをいふなりといへり
を臍の緒をつぐに用ゐるし南殿の平竹にて切ると醫師仲成の説なり
たて一刀で七ッ作てきよめて女房中けるよし三條一統にみえたり

○倭名鈔に金銀薄を剪て螺鈿といふ　志貴抄に螺鈿とは伯宅編に螺鈿器本出倭國とんとかう

あをがひ　あをあび　淮氏に海色池とあり　乃ち是なり　胡曹抄に民なりとあり　あをあびとは

あをあび　東漢に青女とて或ハ女房とも　光仁紀に天下の氏姓青衣為采女といふなり　西宮に青衣を賤

婢れ称といふ　小学陳注に僮使也とあり　○僧衣に青衣といふハ梁法朗ハ

三論ハ祖師にして青衣を服すと　高藤ハ恵灌も青衣を著三論

と講し雨とあり　○命帝著青衣行酒洗爵とあり

あをふよし　奈良ハ松柏にいふ方系第に緑青とかけり　神代紀に

奈良坂に青丹よしてと畫家ハ丹青に用ひ　青丹吉とも碧丹青ともまた

若ハくさりなとにいふ石緑なるへきなり　青丹吉とも碧丹青ともまた

あを丹ハ赤といふ　ともに丹を用ひ　ともに丹を用ひ

ともつかるる詞なるへしとも　ともかくも助語とも呼けるなり　辞あり

又よとやとをしてさけハ文なり

あをとをぞ　神代紀に青和幣とあり　麻を用ひて古語拾遺にあり

あをみづら　多系第に依網原とつくり　神代紀に生天吉葛とあり　活

よりて青角髪と書ハ訓を借る也といふ

あをがきやは　萬葉集に青垣山とあるハ吉野とあり　古事記に青垣東山

とあるハ御室山と　神賀詞に八雲出雲風土記に八雲静坐

國青垣山廻賜とあり　一説の名大にして樹木ハ茂りて青垣といふ

あをうなばら　萬葉集に海の祝詞に青海原とあり　神代紀に滄溟とあり　滄

海之原とあり　○倭名鈔三河郡名碧海とあり　ともに祝詞なり

あをさぶらひ　康富記に青侍とあり　青年ハ或ハ青年ハ　生字

ハ家なり　今も赤襪あるとも　ともに　ともに

ともにて　ともにて　ともにて　ともにて　ともにて　ともにて

あをひとくさ　日本紀に蒼生とあり　古事記に青人艸とあり　小

人ハ苔ヨリ比モ多クヘシ

あをうーがき　神代紀ニ蒼柴籬トヨメ蒼ハ柴ヲ活ヌ意ヘシ

あをくさづの　神代紀ニ青草トヨメリ延喜式ニ東草ヲアラヽトヨ
ムモ色ヲ以テヨヘシ

あを紙　ヲレヤマ　古事記ニ青葉山トヨメリ字ヲレヤマヲ山ヲイフカ
萬葉集ニ多クヲレヤマヲヲレヤマトツヽクルハ古義ニヨリカケテヨリ鴨ヲ羽
ヲレヤマトヨメリ　ヲレ義ヲ集リ鴨ヲモ羽ヲモイフ○若狭ノ
ヲレヤマヨリ国ヲ○源氏物語ニ若ホトヽギス夏ヲイフトヨメ
あをどりたち　古事記ニ着紅紐青摺衣トヨメリ山藍ニテスリタル衣
ヲ小忌ノ事ニ○後世大嘗會ノ時ハ小忌トイヒ臨時祭舞人ノ忌ヲ
ハ青摺ト名ク裁縫ノ法カハルヲカヽルヲ○踐祚大嘗會式ニ小
齋親王門下皆青摺袍五位以上紅垂紐トヨメ○あをどりノ紙源氏ニ
ヲ染ル紙ヲ用フ蝿ヲトリノ唐紙ナルヘシトイフ

△あか　垢ヲヨムハ汗氣ノ変ナルヘシ　大日経疏ニ梵云囉逝是垢義トヨメ
○船中ニテ水ノ事ヲアカトイフ淦ヲトリ又ヨモイフ淦乃集ル所ヲイフ
ノ水ノ入ヲ忘テ垢トイフカ蝦夷ノ方言ニアカヲイフトイフカ
ヨルカヤ○ある水山ノ井ノアカヲモ属ケヨムハヲモ閼伽ハ梵語漢言
欝勃蒸煑雑香以其汁供養佛也トイヒ又盛香水盂盃之総名トイフカ
授ケトヨリ○あかたむハ附ヲ献ルヲヨリ○俗語アカタ他人ナトイフハ
赤ハ空盡ノ謂也

あが　日本紀ニ吾我ヲトヨメリ万葉集ニ多ク用フ

あかがね　万葉集ニ橘トヨメリ赤クナルヲシクミ反ヲ一ツノヲ略カ
○眼ヲイフカ反クシ涉湯殿記ニ諒闇ノ時アカリトイフヨリ
今モ忌ノ色ヲイフ色カ
あかー　赤ヲイフ赤ハ日色ヲ小ハ略シタル字カ○日本紀ニ赤石トヨメリ
播磨乃明石ハ延喜式ニ赤石ニ作リ今海中ニ赤石ヲ出ス硯ヲ
用ヒ良トス○衣ニ赤ヲイフ櫨ニ茜トヨメリヲヲトイフ○

朱にまじれば赤くなるといふは野客叢書に近朱赤近墨黒といへるより

あがる　日本紀に散亡をあがれおぐとよめり散去をあらけぬとよむに同じ源氏物語宿木物語にも此辞見えたり人くあがるけるひといふも同じ○源氏物語に明石の浦あがれのみつと車をかぞへいへり流も此義なりといへり○田舎にさすらへとう思ふところをあがりといひ又あふどもの字容あもとく去をあがるといふ皆あがるの義にて人の死して三日のあがりすといふも同じ

あがく　万葉集に青駒之足掻（アガキ）を見えたり東都賦に馬蹄餘足とも見ゆ跪をあがとよめり○新撰字鏡に跂を鹿のあがくとよめり○童への躁妄なるを俗にあがくといふもあるより出たる詞なるべし

あがる　上升をいふあがる反ぐ自他の異也○物の直（アタヒ）のあがりさがりを低昂といふ漢書に卬貴（アカリタカク）氏賤（サカリヤスシ）と見えたり○魚は水に游潜するを其死を升（アガ）るといふあるにたつるといふがし是なり○伊勢人は天気のはるるをあがるといへるは雲揚るの義雨を雲低といふがし

あがた　縣をよめり分つと通ぜり和名抄に縣はあがたとよみ諸縣をもろがたと山縣をやまがたなどよめり○縣主は神武天皇の御代より見えたり縣邑を治むる者をいふ後あがたぬしとなへり○國府を指ていふなり一郡を指ていふなり古事成務記に定賜大縣小縣之縣主と見え後に郡となれり○縣の官は禁裡の西の方也此御門乃名によれり諸國外官の掌除目乃行はるを縣召といふ縣は此社に詣て除位を祈る○物語なとにあがたみえたるより出ていへるは田舎（井ナカ）の義なり万葉集にも淡海縣の物語せんとよめり○縣の井戸は一条の東洞院の西角と拾芥抄に見えたり○伊勢鈴鹿郡縣神社式に見え倭名抄に英多なとあるとよめる是也古事記に倭建命御子建貝児王者伊勢別之祖と見えて姓氏録に縣主日本武尊之後也と見え今岑の川崎に社ありて縣大明神と称せり○姓にもいふ太平記に見ゆ

あがつ　神代紀に散字皇代紀に班字頒字をよめりわかつの義也○班田（アカチ）は今にくばし縣をあがたとよむは此略といふ説なり班田使は朝廷より六年に一度つゝ國毎の田地を改めらるゝよりて班田使といふ

あかも　古事記に赤裳と見ゆ女の紀にも見えたり万葉集に珠裳ともかけり

あがむ　日本紀に重又崇をよめり俗にあがめともいふあがむ義なりあがまへるを
いふまへ反め也上ることなるへし

あかふ　神代紀に贖をよみ新撰字鏡に購をよめり万葉集にもあかふといへり
をよみたり今あかなふといふも相称(アヒカナ)ふ義にや建武年中行事にあかなへと
つかふなと見えたり所をさしていへり霊異記にあかめともみゆ○薩摩に産
するあかふは榕をいふゆつり葉に似たる木なりといへりその葉をあかふちやぶと
いふ性よしといへり

あかほし　啓明をいふ暁の明星也神楽歌にもみえたり倭名鈔に明星を訓せり
即ち歳星也

あかつき　暁をいふ日本紀に雞明を訓し万葉集には旭時と書りあかときと
もよめり明時の義也新撰字鏡に昕をあかつきとよめり○古今の
つれなく見えしわかれより暁ばかりの哥は古今一部中の面白き哥なりと定
家の説なり○万葉集に暁降(クタチ)と見ゆ暁のほど道のを降ちといふなり

あからめ　字書に掬縲はあからめさせぬ縲へるといへり日本紀に倏忽をあからめ
さするもよめり大和物語にあからめもせずとそひぬるに今昔物語にも
其のあからめを結りといひ袋草紙に
大井川岩波たかしいかにしよ底もみちにあからめなせり
よそみするの義なりともいへり

あがきみ　源氏うつほ物語なとにみえて日本紀にはあごこゝとよみて我君と
なり怜ことをさぬる時又ハ親ミ又とふる時に男女に通じていふ辞なり
神代紀に天稚彦の妻子の辞に吾君をあがきみとよめるも亦同し

あかしもの　贖物の義也身の禍をあがなふものといふ意なりと公事根源にみえて
見ゆ後拾遺集に詞ありてあかなへと見ゆ雲客所役抄に内蔵寮供御贖
物といへり○清祓の時に流るゝ物ハ土器を覆ひて其内へ息を入上を紙に
て結て行事官より調進すといへり

あからこ　公事根源六月御贖物(ミアカ)の条に之ハ一日より八日まであからこを
てまゐる朝餉にて主上にまゐらせ四のかはらけを指して上にあてる紙に

穴をうがつて沖息を入るなりと見えたり
あるひと　古事記に紅紐と見ゆ小品衣につくるを今紐付衣といふ
紐なり又紐をたくみてあひ結ひたるを紐といふ書紀
新勅撰集に
やまぬまそすがの長ちかひをれば赤ひもとけぬ神はつるかな
あら神はつる　万葉集に茜刺とあるハ假借にて赤丹指れば日に映ずる
ゆめる日邊に赤氣を生ずる所謂霞也之今児雷れ天が紅なりとよふ是
なりとも生ず菅神はつるまたまくろ
天に赤なるひとつよハ行もまた沼うさえおそくさ
有道に神詠によそ○紫につけるゆめるハ赤氣に赤氣を生ずるを
を朱ら引ふなと生ずるゆめ紅紫といふことと生ず
あらうこと　日本紀に急字儵忽之間なりとあり俗に狭間に義日
光にちらと指出るを掲に狭るをぞ応にしたがへし雄畧記に取
急取假を訓せり後拾遺集にいつこと海に田舎へかる人と生ずる

書言故事に急請假日取急と見えたり假ハ暇にすなはち俗に咋と訓ず
注に暫也といふ偷閒とよむも之也神代紀に天折を訓せりハ意に
暗しとなり神武紀に暴風をいふ波世白地とな
らんとよりてハ暴風に小明様に見なすべし
あらひく　ゆり引はなしなれ裾に裾はなしとなりひくこと
ふ之同じ万葉集にいつこと引ちぐるを又いつこと引
ちぐ裾はなれ一説に乱れ乱れしてなりとする
同じく万葉集に日も朝もつぐけよりといふ美なりとい
ひつぐめり　縣召ハ外官に除目をいふ京官に對して名づく正月十日より
十二日まで行はるる○西土に縣官に召と被ふる
あらかれか　續日本紀に元明祝詞或に赤丹穂と見えたり日本紀に
熟稲をいふ
そそ赤土をいふそ赤き作芝を穂と
あぐらしけ　源氏竹取に見えたり吾佛に義吾会とる人をうして

いろは抄に佛より知るる況やを以て伊賀阿我の觀音親房伊賀經に見ゆ

一系糸は親鸞上人

あるかあるに二世をかけて里人はあるかをかけをかしをしん

いろはいます　大嘗祭祝詞に豊明明坐年皇御孫命とゑくこう万葉集に

見し明めをまひなといふる同しハ天下の事をんのうめ世の先

おいしまをんとかひていふ

いろきあるる　万葉集に見ゆ赤紐といふ紀宣命に明支淨支直支

誠之心とも又清支明支正支直支心とも淨枝明心とも見ゆ神代紀に

赤心とも清心とも明淨とも仲哀紀に明心敏達紀に清明心をゑくこう

あつさきたる　万葉集及源氏に見ゆこう暗方は形容

いろひきはいと　紀皇極六月十二月は次第に附調進るを糸なり明曳

糸と後式帳に見を赤引糸と延喜式に見を神風抄に尾張国に赤曳

糸に見を參河国に荷前御調糸と也　令義解に參河赤引神調糸とゑく

三列額田郡西郡三郡氏なる考に今も殖を植るを森とゑいふ赤曳

明神まつりは年中行事に赤良曳荷前御調糸とも見ゆこう　○參河

寶飫郡に赤孫の名ありて和名抄に安加比古とゑみしも赤曳は將

なるべし

△いろさ　秋といふ飽は穀已に成て萬民飽足は附るハもいふ

めりはまと千秋長五百秋長之瑞穂國と名つけゑまひしもを爰成へし

○安藝は國も同爰なるゆや○爰爰多り秋は番のようとゑ光るを松

乃ゑひといふ

あぐさ　日本紀に所見に伊奘阿藝とゑ事せゑ去来吾子は爰くき吾君

乃爰ともいふ古事記に登田天皇大雀命に詔して佐邪岐阿藝とは

さまいふ○倭名鈔に大辛螺をゑめりふしは大きるをいふ○同書に腭を

ゑあり唐韻に口中上腭をゑいふ腭は口ぐりは爰が口反きくあぐとくもいつり

とハ戸は爰に倍に口ぐといふぐとゑ反ごくあぐとくもいふ腭ハ齶に同し或ハ

腮とゑあり顋の俗字に正韻に顋音鰓とゑゆ新撰字鏡に鰓とゑ

あきらう　明とよみ書そのうけしともよみ神代紀に湯もみ
霊異記に聞も聊もよみ文選に景もよみ○あきらめると光仁紀に詔に
見行のらべともよて童蒙頌韻にハ甄とのきらめるとよみ○名
に大伴方見とまきのきらとよめり
あざとふ　日本紀に喚喝傾浮又得言とあり言事記に阿藝登比と
書り腮と強る義なるべし又魚れ水に泳ぐ口と開き言問やうれかくち
といふあり蜻蛉日記に手と撥面と振そそられ人れあざとふやうまれハ
といふる色なり
あきつしま　秋津洲と神代紀に奇にのきつしとも見えたり
又百秋瑞穂国といふに同し神武天皇蜻蛉れたるひハるに一義を密
に事ふ放へし後撰集
あきはハ乃もかくれ雲に跡とゆる　紀まりや郎君れこそ
日本れ豆形秋津虫れ東に向るに似ることふ説もけ奇の心なり
あきはがみ　万葉集に蜻蛉神といふ日本紀にハ蜻蛉といふ

がこ　ともあり同一言く
あきれこや　中文とや号長秋宮れこそ源氏に秋れ法方とも見えたり
又あきれこや人をこそ奇にもあり後撰に皇太后宮大夫に任せし時
　　ものれとよるかに題すれけるを秋れこそ見るそうれ
あきがしハ　万葉集に秋かしハうるやけ色とてうり商柏と賣とも
けしとり古へ柏ハ神供供御に日用れ柏をれハ商をふ人をしあり
本草唐時立秋日京師賣楸葉とも見てうり
あきらうず　歉字れこそ不飽足れ歉字書嫌も通せり大学にそハ飽足
乃ことあり新撰字鏡に嫺とあきらうとよめり
△あく　明とよめり神代紀に開も同し○飽とよめり秋と義を通せり○人
とあく人とよめるなといふも厭れこそ義ありて奇にあく秋にうを
とり○倭名鈔に灰汁とあり祭統考工記にハ説水と見てうり色も飽の
義なるくどれとふ俗語も色より出るへし源氏に奇に
紀れこそ色とも見しかども人くあくまいうるてゆなり

○幄と青少年も呼つる幄屋幄座なとゆ

あぐ　上字拳字揚字なとゆあり俗よりあげるともいふげるなぐ〻○

埃嚢抄ニ酒とあぐるといふハ釃字なりと也り倭名抄ニさけをそゝぐも

凡て也り○鼎ニハ扛と也り首ニハ翹足ニハ蹻也ニハ發書ニハ揭なとれなり

○常陸詞ニあげるといふをさけるといふ

あぐら　胡床とゆあり古事記ニ呉床ともゆ足座れ義とも繪れ胡床

倭文纏の胡床なと日本紀の奇ニ床机といふ也〻○坐れ体

ういふも義同しよそかくといふ○行れ掛法ニ今の足代れごと也〻

あくび　欠とゆあり飽ぶりれ義なるべし新撰字鏡ニ吹哈とゆあり開口

出氣之貌と注せり

あくたふ　倭名鈔ニ淋とゆあり灰汁釜乃義今もるる元他ニる者と

さしてあくたふとゆ也とゆ〻べし○悪なるられて灰汁れ元淳ニあづる

といふ諺ハ唐傳奇ニ懲沸羹者吹冷齏といひ拍案驚奇ニ一日喫蛇咬

三年怕草索といふるニ同しゆくれ元ハ文房清事ニ淋過敗灰と見てう

あくたふ　倭名鈔ニ糞堆と訓せりふハけれ義今いふごもくなり○俗語れ

あくなひもの　塩の物せしまや又悪熊れ音ニや古事記ニ見ゆ

あくがる〻　あこがるゝともいふうかれと同じ行く反うこ古今雅抄ニ

ひちこちもゝ浮宕と古とみえうかれとまよふなるこ又ひきこがる〻義

なりともいふ

△あけ　明と赤と多くハかくいふ物ニ赤ニそまれれ〻○事ニ也ける

なとゆハけるなくく○霊異記ニ緋もあり

あけがれ　曙とゆあり詩經ニ明發とゆこ日本紀ニ會明昧爽古事記ニ開明

なと事ニ也んとして物ニかのかニる附ニよそれくとけるれ浦ニ

ともてあり○奇れ部ニ春曙とゆ附ニ花ともまこ送ぬひ物れ

未ニり二月の初めれ也べしとゆ○艸ニハ救荒本草れ銀條菜

なりとそ

あけぐれ　文選ニ昧爽とゆあり明やみともいふ義れ物ニて一ニそう

暗くなる所なり拾遺集

ねばらけひくりしれにえすゆかりとやねなと人のいふらん
鶴林玉露に天之將明必倏暗而後明とみゆ
あげそり　日本紀に幕をよみ倭名鈔に幄をよめり上下四方悉くおほふ
て宮室に象るといふ也揚張の義なるべし
あげまき　新撰字鏡に髮をよみまたに總角をよめり集韻に髮音總
與鬆同馬鬣一曰髮角とみえ正字通に束髮謂之總以布爲之ともみゆ
結纏の義也詩の注に結髮也とみえ結髮をかきなげとよめり○神樂歌に
あげまきをわさ田にやりて梁塵抄に上童といふ男女ともにいふ稱也とみえて
さうされしと女はいで四季物語には御神女もあげまきにもちを神につらふま
つりしとあり牧童をいふ成べし　拾芥抄にもあり
あげまきの歌にこゆる庭をせよたのしびをつくしけるなり
○あげまきを結て車をいふる車鐙なるよまさぐ絲糸のくみさげをいへり總角に
似たるべし流蘇を訓すべし唐詩選の注に幃帳間所懸五綵同心下垂者曰
流蘇とみえたり源氏物語に

なかまうちなりうさあきりをひまひこめ同し所によりてあいふらん
○鐙に東方と義訓せしはとんがうむすびに据ゑるにや○介品の名に呼ぶ
海燕のされるといふ結びし形に似たる蟶をいふ字まて似て肉の組なるを
もてなり一説に卽めづらしきや也ともいへり
あげづらふ　日本紀古事記遊仙窟などに論字を訓ぜり遊仙窟に平章ともよ
めりなげは挙之はらふはなさはといふ辞引つらふ掛づらふの如しらふ反るとえ又
挙衡の義にや言挙し照しいふこと
あけのそほぶね○　万葉集に赤曽保舟とみえたりそほは赭の義丹塗をいふべし
漢土の紅船なるべし
△あこ　網子の義也今なみこといふ綱を引とて網子どもとかり綱をこぞるよ
なびかすとなことゝなれるなとよめり○下火をよむは唐音也國華合記集
に蘆を下室とかけり○西州にて緋魚といふ赤魚の義伊勢にてはあかう
をと稱す○播磨の赤穂をあこと呼はかな反こし
あご　吾子の義親む辞なるべし神武紀の首に阿誤とかきて子を思ふて

いふなるべし乳児を呼てあごといひし事ありや物語にみえたり万葉集巻
五大伴氏は和歌にも清河と呼てあこと宣ひ職人歌合にあごやが唱とて
この世ならぬ見しあごぜとも見ゆ菅家の幼き頃よみ給ひ和歌とて家集に
梅の花紅の色にも似たるかなあごが顔にもつくべかりけり
菅原系図に菅公の幼名も阿児と申り○吏部王記に元興寺の僧童子
なる所あごと名つくといひ著聞集にあご法師といふ小童子といひ法撰集に
亭子院にいまあごめしける人新続古今集に傀儡あこ丸小松院乃御
時の不にあがりごあり一休和尚はあこが膝くぐといへり源氏物語に若君を童名に円
教坊のあこくそといへるは平に名をもつけたると見えたり太平記に田楽の名
にもよへり○地閣をも譯す全浙兵制にみゆ

あこめ　梁塵秘抄に賤き女といふと見えたりあこめは吾子めはとんでもの称なれば
なるべし○衵とよめるは倭名抄にはこめぎぬとよめり衵をよみひはりかす右の
あこめのきる服名は同しくいふなるべし唐韻に女人近身衣也と註せり
一説に赤染の歌くといへりかぞ文に也五節に茜染の衵見ゆ延喜式に褐を

よあり説文に短衣とよみ又童子の汗衫の下にも着る文二ちゝを重ねて用ゆ
宇治拾遺に太宰大弐の子ども事を物語にみえたりおほく男女とも小用なる物
なるべし○麻よりとめといふも同じ○三議一統に䙝の相と云り

あこえ　日本紀倭名鈔に雞距をよめり新撰字鏡に距の字もよめり脚小
肢の義也今いふけづめ也

あこや　阿古耶は所の名尾張にあり多くの記にありと云へども
これは吾子の義也龍の珠やと呼けるなるべし新猿楽記に阿久夜玉と見え万葉
集の鰒玉で六帖によこやたまと云へり古くは鰒珠に作れり一種阿古屋がい
ひとのいひつたへに和歌の浦なる胡蝶貝といひ伊勢貝ともいふ
世の人伊勢の真珠の上品なるを蚌珠といへり萬葉集
あこやといふものがらを後世に真の海とみるもあり
重き阿古屋ほか貝よりも多く記にもあり貽貝の珠は真珠玄珠なり
といへり文選にも其物多しといへり○寛方中外の名を云うあこやの松
乃名義も同じ今は出羽に属せりとぞ

みちはくにはあさのはれて出るを晴やらぬ

△あさ　朝　とのよあはいはくしさかし狭と共に狭の方をよはとうすら反さ也○麻　とのあは海さ義し麻は狭衣物語に或は青割は義白栲まかへ
さる言也栲を白和幣とし麻を青和幣とする○麻とそそぎは異とし又麻
は義を流とをとれて祈まとよりあり如是祈よ
義まさ〜はさを共稔とりかさはちをまるはて風をすゝしき
○あさがらは古語拾遺に麻柄とあるとうの○麻をつるよりをぞと也とる絲は
荀子に蓬生麻中不扶而直とあるとうの勅勅撰集に秦時
世中に麻はあるとのくはりよりは海乃蓬はをして
あさの　朝寢とのはさるとまに寝はいはくす○朝まどいもを同
あさ子　三代実録に童謡（ワザウタ）歌をまりは同りはさるとあるとうの勅撰宮
続に餬をあさるとあるとあり倭に捜宮とあり倭にあせりさがをとあり
見なり万葉集に求食をとあるむ文選に揺尾而求食とのぶるはあるとよて
足捜は義とも見り定家は捜とあるとみ注にまはゆるぬ平はあく

ゆをあるれとも海あるはあるとするるとあるはは稱なるるるへし
あさり　漁　名抄に漁を漁アサリ海あさりとびなまするとびとりとあの見を海
人は海をみとと見り万葉集に湾廻をはさりするとあるは義をを訓さり
山川はあさりとなるて海を海を海を名なるを
名抄閑居に阿閑梨とあるは海とあるとうの○浅利與二義遠一壇
浦に遠矢に名をはさり坂板額を要一人也
あさ〜　浅　とのは朝と義を通りは海の助け義へし
あざへ　神代紀に貯をみ童蒙頌韻に又をあり雑（ヨロ）へ支るはをなるとい
屈り倍はまをるとはをるとも見りは合せ交る義なるへし
はるをざ　延喜式にはは濱蔥（ヤ）色は義と濱緑は名をは
屈り権記にそをとんとうり○水はをはは紅は白あり
あざな　字とをは義り交名は義と人は交るとり呼ぶる名をはなり○字を
阿三那と譯せしは中山傳信録に見て梵語に悪利那とあるは俱舎論に

えゆゑハ文字の字也○字生入学の時文章院の堂監ニ申て其名籍を
わざなとせりとて儒者となる人ハ必あざなをつくといへり源氏の抄に見えたり
後世の俗諱名をもあざなといへり宇治拾遺にも見えたりよそわざなの義なれとも
見えり○国の名をあざなといふ字の義なるへしありてわれけるといひ飛鳥に
てわぬるといふ

あさつて　明後日をいふ明を去て後の日といふ義なりといへり西土にハ翌日
を明日といひ明日を後日といふ大後日も同し此明後日を倭に明後日
といひさてつてとも云りそとしあさつてと呼へり今日より重ぬ二日に後る名く
志あ及さあるをさてさつてとも云ありつ○全漸兵制ニハ後日をあさつて大
後日をしあさつてと譯す

あさがほ　朝起の義をせといふ紫式部日記に朝がほのなりひやる須磨の
ゑたり○倭名鈔に牽牛子をよめり朝顔の義にて朝ははなほくとひとそ名
づく後なりとて後水尾院御製に
朝がほハあさまるくり咲かへて盛り久しき花そなりぬる

○万葉集に朝果とよめるハから音をかりて書せるなり○蕣をあさがほ
とよむハ中比よりのことなるべし倭名抄にハさたかにすと別せり木芙蓉の義
なりされバ蕣ハ木槿也木芙蓉ハ俗にたゞ芙蓉といふ朝開暮落花の
名によれるハ蕣ハ木芙蓉なるへし一説に萬葉集に
朝がほハ朝露負て咲といへど夕かげにこそ咲まさりけれ
といふ事にもよれバ蕣といひし事古しといへり○新撰字鏡に桔梗をよめり
又かにくさともよめりされバあさかほも古へハ汎くよびしなるべし○蜉蝣と
いふも近世の事也朝に生し暮に死するをもてかくよぶ也文選の詩に蕣
と對し作るによれる成へし○貝の名にいふ拳螺の類をもさして和歌の
浦にあり○あさかほの更衣の墳ハ一條太政の佛堂にあり花園院の
緑りし人との應仁紀にみえたり

あさざや　遊仙窟に鷲新なるに鮮とよめり明さやの義にや源氏にあさ
やぐともえゆ中古の詞にあさやかなるともあり又あざやかけしともよめり
けし又ざえ　新撰字鏡に瑳をあざやかにとよめり○大嘗会の節會に献

鮮味といふハ雉を梅の枝に附るを蜜柑と搗栗とをひげ籠に入て松の枝に附ざる也 圭基の鮮味ハ兎を楓の枝に附るを籠を麁(?)草の枝に附るなりといへり

あざむく 欺誑をいふ 新撰字鏡に譎また謾又諛又譚をよみ 和名抄に蚩をよめり 浅智(?)く我なるへし 俗にばかすといふ是也 かにかくなるをあざむくとよみしを然するにていふハ非也 冷艶全欺雪の句みつへし

あざける 嘲をよめり 新撰字鏡に謔をよむ 浅けるの義なるへし 人を浅しとさみするなり

あさぼらけ 朝ぼの明乃初りなる辞なるへしといへり 後に朝朗とかけり 古今集よりみえたり

あさびらき 万葉集に朝開をよみて ほにさがらけの須すしきも紀覚の語にハあさぼらけハあさびらきの語を略したる也といへり 万葉集に漕船の事によめるハ船の辞なりとも云り 或に遣唐使開船居祭などあり 西土にも開洋の名あり

あさめよく 古事記に見えたり 朝目好の義なるへし 今もいふ辞也といへり 紀に大嘗會の條阿佐米主水(モトリ)とも見ゆるハ悠紀主基薦享の事畢りて采女還申の事ありて辞にあさめよくとよひあらつきのみけたひらかにつかへまつりぬと申すとも 勅答にハよしと宣へり

あさくもぶ 万葉集に明去者とかけり 暮去者(ユフ)に対しといへり 朝しもなふの義 しもなふ反さ也

あさもよし 万葉集に木人木川また木上(ヘ)宮城於道(キノヘ)などに冠らしめて其本ハ紀伊をいひ城於ハ大和の地名也 例ハ皆かしと見ゆりと續くるハ中比より訛れるにて 麻裳吉木道爾入立真土山とあるを正義とす 是麻の裳をきるといふ意にて続けたるなるへしよて同集に

麻ころもきれハなつかしき紀の国の妹背の山に麻まけ我妹ともよめり 紀といふも裳といふも同意にて紀伊ハ元ハ紀伊の国として名の負ふ此国ハ神代に八十木種(コ)を殖しめられしより名つくる所を以て植の本の名をなす 麻もまた紀に宜しき也へし

あさかきひ　朝餉とかきり天子は粥の供御とつかへ祝は清膳と
称す○朝餉は百又御膳といふは清涼殿にて朝夕は供御と俗にいふ
あさりは供御は毎日一日宮は供奉は事し御飯干鯛は内膳司濱嶋供寸
平盛高盛は御厨子所の預高橋供寸

あさみどり　浅緑の色し延喜式殿の条に小許春とかけるは義訓なり
朝野群載にもあり

あさけゆふけ　朝食夕食は古事記の奇霊に饗殘と訓をへ
今も俗語にもいふ物なれはいつれ朝飯と上下をそのまゝ
とせり○たく物夕は言もよりされとけは氣は氣なるへし或は朝
影夕影は氣しともいふ

あさるゆふな　万葉集に朝魚夕菜とかゝ鰒は貝とも海草とも
見もなは朝夕は菜羹なるへし細なるつゆ物なり
きさむるとあるは切なるへし物菜は義し

あさこもみそ　日本紀に素服とあり喪は服とかゝ為へし

素服は布衣と見るこなるへし新撰字鏡に方宣嚴之府大后御
服奇物荒妙の衣とあり今も細布とかゝるとなり○海
人藻芥に海人の服衣は白直衣に神は霜を略し縁金は白布に墨をそゝ入て藻を
なり烏帽子は小結を略すし縁金は白布に墨をそゝ入て藻を
染るなり乃紀に竹を藻を也といふ

あさるけゆふけ　たく物夕は言もよりは朝魚夕菜なり物なるへし
○あさなけとかりいひて日ゝくとあるは朝夕と物なるへし
けよりをいふひるもあるをもし万葉集に今集にあり

あさるのぎゆふるのぎ　布と衣同し又海亀なるへし風あぐやゝ海
乃なるへしとあり

△あし　脚足をいふいやしきいやなるいやなるし俗名抄に趾とあり○獣は四
足と字縁にそやでとあり○源氏に上行とあり○源氏に上行とあり
なりとあり○毋は足は産に吃物とあり○凶悪なるをあり○葬は初め
乃葬なりといふ周礼の初めまゝ生しるとは葬なりとそはいふと葬

原出ふしいなり○白き條ばかりを雑ぜたるを○筆簗は簗に漬ぶ
籍脚は幕を用ふるなり○幕火幕屋葦垣葦簀幕帳幕などなり
○流紙は茅を多くもちひて流すなり○錢神論は無定而
走といふを据るなり料足用脚なり紙は○ばうこう
据はばうとは紙の糊紙なり○器物は足る器なりいふ事
類聚雑要抄又猫ばうばう

あった　朝旦なりとあるなり○蘆田は信濃信州なり米持氏なるは武衛殿
あどろ　延喜式は網代とひりみ河は水奥とうんとて百千は机を網
引部はうちとあるなり○鄙俗はあずといふ
ろ本ともばうろうとも○簾は竹なり西土は竹を魚筌簖
簾なといふなり○網代車網代輿網代笠
なとふ字を借なり実はあむしろは氏なり○浮屋は網代屋風も

ろう河海は籧篨屏風とまて漆胥は○細を細まてをち合を
るは昔は山荘なるべしかを調度は宮なるべしとなり
童蒙頌韻は籧篨とあり又ばうろうは天竹は世俗物語は
○魚はいふは讃列の方言たべなりといふ○小源頁は惟康親王を廃也
將倒は海は網代輿は載て京師は帰るなり時人將軍京師は流る
といふはかるを倒をばうしなり
あしを　日本紀は繒をみわ名抄は攣を新撰字鏡は聯を魯は
をとあり足緒は足革なり又山足緒は其制必異と
いふ菅は紙なるべし
あしを　新撰楽記は葦手とかひは浮屋は紙をもそなる
けるなりのおひさまなと雑は紙をもそなる
色紙は芦は葉は中は文字をもしは水石なとは形なるもをすること
いふは信濃物語はばうとはもとは天徳奇合は序はもとは机のばうゆは
みは花をひはなるはすはばうはばうはもとは奇合

まろかれは卵へはしそは墨そくろく色よりそむる者はまろくさ
あし白は記に香包は必もはし手書に出へしとみえてあり万葉集に
多く書りなとにはしかるを今にては書ける手墨はしてなりけり
又悪手みもよせそよめり今悪筆といふ和泉式部
ふでもちびゆみて掻はかきぬは見やなるは法はしてなりけん
の帖り

あしきて　を持つるを海に流れ世川の詩はみくろはかとなりつるを

あしびき　宗祇抄に見えたり日本紀に脚日本とかけり私記に山行には足を引て歩まうとせて出るといへり万葉集に足病足痛なと出ろも足を出ぬへしされと山は足ひろくなびきてもくひろうとは宗祇を出に山足といふへし文選に山足とかりとよめり雲林石譜に高下峻峭無捜脚ともみゆ日本紀に脚日木此傍山万葉集にも足檜木乃片山雉といへるもさらに我はあひきは義しは脚引あひきはやとつづくは訓語の妙なりなといふも不稽は説と伴うぞやひきはしりとそいへ多れ一説に足繁

木の義本は山足に繁くして出を出びと通へり神代紀にも足は離山祇となると見えたりあしびきも繁きは足ひきを同じとせとよめり○海曲足ひきといへく歌に出る事多し菅神の歌に

足引のこなたかなたに道はあれと都へいさといふ人はなき

あしつの　倭名抄に菼とあり今も葦にはあしつのといへり即蘆芽之蘿ともよめり○新撰字鏡に金牙を訓せるも相似たることなり

あしかび　神代紀に葦牙とあり葦はめをいふ牙は芽に同じ古事記に阿斯訶備とみえたりかひをもひとつに濁りてよむへし

あしつゝ　奥義抄に芦のよの内にうすき物あるをいふと見え顕昭の説に芦筒の義なりといへり後撰集に

難波潟かりつむ芦のあしつゝの一ふしも君をわれや隔つる

見え漢書王莽傳に臣莽上與陛下有葭莩之故師古か注に葭蘆之莩者其筩裏白皮也言其軽薄而附著也故以為喩といへるによりてよめるなりまた葭莩之親ともみえたり

あしたづ　倭名鈔に倭俗謂鶴為葦鶴と見えたり日本紀に川雁とよませる
なりし〇禁中の箏(コト)乃名にも有しよし玉葉集にみゆ或ハ玉鶴の義
あしつを　鶏尾琴に見ゆる緒をいふと長暦官符に見えたり或ハ足津緒の
義なり衣笠内府
葛くれの東のそれのあしつをによりかけて斎宮にたれ(?)
海士とけるにはしつをのつなを引あけて禄をかくるとも見えたり又ひんづら
のをはしつとよめり
あしのけ　和名鈔に脚病脚氣と見ゆはしのけの略也といへり今の脚氣
御遊をも源氏物語なとにかくびやうといへるも赤脚病の意也
續日本紀に緣脚病從櫻井頓宮還と見えしよりきや反りしまでかくびやう
ともかつけともよめり後撰集に
はしひきたやまひハすこし蹈かたに蹈をいひぬハ苦しきをのを(?)
あしなへ　霊異記に蹇を訓り和名抄に蹇をよめり万葉集に足疾をよみたるか
今に葦若末乃足痛吾勢と見ゆはしなへのあなへぐわらせとよむへし葦笛

を蹇といひたりけるなりといへり〇新撰字鏡に騝をはしなへぐるとよみ
鼈をはしなへがめとよめり
あしかる　神代紀に強暴をよめり悪しく育の義くあるへし強暴態をよて葦
刈業におて難波によめる是也〇蝦夷の俗に称をはしかるといふかるぞ
とてもらんもさとら蝦夷東北の地名あしこらんハ称也といふなるし明の萬
國圖に室韋の東北海に称國ある是也室韋ハ夷言の志るる是也夷人相
傳ふる所の三十七島の中にあるにしこらん文志るるとし文志あり志りと
いふも萬國圖載る所の韃靼の東南によらり室韋の地方にいる海島ありと
いへり或説に称も阿蘭人ハあけかなふ星月称のなしともいへり
あしうら　万葉集に足占と見ゆ足をもて占なふをいふ又はしうらともよめり
丹後ノ足占山はり丹前の事なり
かなしけれ旅のゆくへハうはしうらをさて娘み見るはしうらけ
軍書に欲必則莫令卜問軍吉凶とはまたおりひうかりとそ〇新撰字鏡
に蹕をはしうらとよめり踦趾もこ蹠同し

けり〳〵　葦原ハ葦生し地なるといふ○葦原中國ハ此邦ハ号なり天
は神ハ世を治し天孫より宣ふる国なり天上を射せりされとも此国を
も天降坐て治もまつりたまひて呼なくこれを宣ひしと何方も皆葦
原なりそなはゆる所ハなりけるゆへ○文德實録ハ天安
二年伊勢国藤原神社官社と見神名式度會郡萩原神社ハ雖海の
葦も伊勢ハ濱萩と云ハおもしろきなり

あーぢちの　萬葉集ハ雖海ハ属けるあり葦ハ古事記ハ
射出之矢如葦來散と見来ハ詩ハ来、弊の来ハ葦ひざといふるまや魂を
華ハ濫觴なりと云り本草ハ蓬蘆農葦花名と云ひ唐詩ハ憂魂一夜泊三
蘆花とみゆ苦も同一

あーはやまさ　芦ハ穂と色ハ絮ハ如小窓清記ハ製柳絮枕蘆
花被以連牀夜話ハ〳〵と見ハ〳〵○まさハ似ると中ハ絮と云ふ歌ハ　芦ハ
穂ともかき絮ハ色ハわるくて見ハ関子騫ハ有るなし
あーふみあてぬ　ほまれ穂ハ芦ハ〳〵ふとそぬ九皆ハ〳〵まーさとり

砂石集ハ應向ハ足踏立ぬ〳〵ふるし所住なくしてねつくはれ地も持ぬ
といふなり林氏ハ応向ハ行ふるて向ふ面牆ハ立ふるへ
と云り見ハ白氏文集ハ匹如身後有何事應向人間無所求と行こと有
もるすとはちなることと行るあーぬみそぬるはあるにもとひるところ色
ぬ〳〵ふとそれ刈をえもりふみそぬハ踏とめぬとそして無立錐之地と
色ろ立ハ〳〵俗語ハ站脚不住と云ふ同一実ハ匹如ハ譬如ハ同一けり
またとひ身後何事行ふんまさに人ハ見ハ向て求るなかるへしと俗く
ふく色子ふるの如へ一説ハ匹如ハ匹然ハ匹夫の匹やと云り

△あす　明日と云あるすのあしたそなたハ名伊勢物語ハ明日はかり列子
ハ日と云あり来日ハ書牘ハ明幾日と云ふも通鑑ハ云ふ○新撰字
鏡ハ明日と云ふハあすなるへし○茅茅集ハ明すけうと云ふるも荒
簀ハ上也と云り

あすハ　常陸國鹿嶋ハ阿須波明神ハ前立ハ社と云ふ新千載集ハたの
しそなあすハ社ふるさすハ榮ハと云ふ久方茅集ハ奇ハ

唐中ちあるべき社神を小祭とあるべいそんかうくまてり

古事記に庭津日神次に阿須波神とうんてうを唐に神しとゆう小祭に

也金比羅に松杉社等なりとも留るしと見安ようとうよりて旅出するとも彩

ふ如へ〜首途（カトテ）と廉塩を上といつも見より出るよ〜廉塩本郷よみえ

ることに社より祀る後なるへし○城形郡名に足羽とあり足羽の

神社八継體天皇なりとゆう倭中編（ヘンキ）郡足次倭名抄に同じ八とあり或に

足次神社とんゆ

△あせ　日本雄略紀の河古事崇神記に河とあせとゝゆるハ吾兄に変崇

め親むの縁も○海川名あひなとに同じ方言に流字とよめる見し又荒る〜

ことゆ也ゆう流御茶に同なんん代まもかハりあせそんとゆう都ゆう

○汗ハ熟湿（ムシミヅリ）の変ためなせし汗水とゆう語手象ち結ようとう齋宮に忌

詞に血とあせとゆう也ゆるゆゑ○倫言に汗とゆう倭ハ禮記に王

言如綸とんて渥まり号令如汗出而不反者也とんてゆうと今せゆうと

ゆう○汗とあぐるハ元史に握両手汗とんゆ○阿瀬川城ハ紀伊ゆ

あせくら　和名抄に校倉とあり今昔物語に拾遺にもんゆあせハ交

乃義なるへし方言に井楼のあくるとみ行ぎて本に角とあ〜

ゆうハ流とも字集に又庫とあり新猿樂記に又倉甲藏（クラ）とゆ俗に

あぜくらとゆう○姓に時籠とあり○山陵に用ゆ寧貞紀に

記るゆ○中山砂に校屋あぜやとゆあり

あぜなハ　神代紀に絙縄とゆあり畔の縄也田に引くすし

△あそ　あそとゆうと古語に日本紀に吾二人

在何無人耶故号其國曰阿蘇とんてゆうあそ韻通せり万葉集に同じそ

ゆとゆうも何そも也とゆうこの阿蘇ハ肥後に阿蘇山に桓武紀に肥後言

阿蘇山神霊池水涸廿餘丈とんゆ伊勢に阿曾山ハ東鑑にんてゆう○

阿蘇大宮司宇治惟直ハ菊池と共に氏を拒んて自殺す○阿曾時治ハ高時の

義子也楠り赤坂の城に陥る者也○日本紀の河ようちちあそとゆうハ

民間宿祢とゆう〜万葉集にも人をうてゆそとゆう朝臣に変ゆう

一説に吾兄より略しゆうあるとゆう○万葉集にあぜるものせるとゆう

あそみ　もと阿曽美とかけり私記に我身に副の義帝王相親むの詞也
といへり続紀に朝臣と填しハあさおミの義さおミそこ朝ハ朝廷の義おミ
ハそのおミ義をもて訓せりあそんと唱ふるハ音便なり阿曽美も相副
臣の義なるへし倭訓抄にもみえ独断に公卿侍中尚書衣帛而朝曰朝臣
諸営校尉将大夫以下亦為朝臣とみえたり○官位問答に昔ハ六位の者
を姓につけて朝臣とかきしかと後多様に成りて後ハ禁制せしと也○上野
国多胡郡碑に左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊とかけるハあそん
の語を略書せしなり
あそび　倭名抄に遊女をよめり詩の漢有游女といへるに據りたるにや
倭名抄にあそびとみえどもうかれめとも注せり
外にハうかる舟ありそめて泊りにねむ遊びとなる
なとうたひてとみえて撰集抄に旅人の泊の舟をおかふ遊女の事よりみえ
たはむれにもよくよめり後世流の君流の名なとといふ是
義なるへし○あそびやちまた織の具にもいへり梶綜也とそ○緑の名にもいへ

ア喙細長也とそ○遊の岡ハ大和忍海郡笛吹の神のやしろ鎮座まし
笛吹の社の神ハ音楽のあそびの意にやおほしけれ
池を笛吹の池といへり
あそぶ　遊字をよみ日本紀に逍遥をもよめり○御遊ハ樂と催馬樂と
つゞきていふといへり古事紀に本づくにやとみゆ○喪の内に遊ぶといふハ舊
事紀古事記なとにみえたり今もよろづのわざをおやめて居をあそぶ
といふも義にや　延佳ハかくここすと訓じ紀にハ啼哭悲歌とみえて遊
宴の遊に似たりむしなるや　伊勢物語の比ハ
遊居とかくも又広さなるへし一統に畢竟死せしを神を楽しむと
いへり○萬葉集にあそびあるきとくいふ詞見ゆ
あそぶす　古へよりきゝへの事をあさるくとかくいへり古事紀に阿蘇婆勢
其大御琴とみえたり遊び坐也びまえハ也あそぶさるとも云さる反すなり
今ハ遊字を用ゐて云なし定めり○小児をあそばせとあるも今昔物語
りみえたり

△あた　神代紀に廻とよめりあハ繰絡たハよ比氣手して量ることそいふなり〇古事紀に八尺とそ云り〇雛をよむに當る比氣獻物比之なり日本紀に虜ともよめり盛衰紀にあくいふまといふ縛なり〇怨と思て紙ぞるとよめ八袖を經に離怨以袖とよんとうり伊勢物語にあくなるもし然比氣ぞいふことなり〇万葉集に些とよみし事伊勢集考之集ふもとうえとう〇万葉集に些字とう光り玉篇に口毀也とあるとう今些部とあさいとと光り

あだ　いとうあることとよりあぐ波あぐ名あぐ矢あぐ弓ぐ見しあぐ波を漁もなりて波をも塩もあるをやうに波をいふとうりあぐうよりあぐ〇一説に神阿多都比賣亦名木花之佐久夜毘賣命よりたるもあぐなとあることあるとしに神名とうかるなるとも菅家万葉集に化字波字をよめり〇新撰字鏡に讕とあぐことよめり〇阿陀の大智八大和宋智弘し問大智とよめるも同し多万葉集にあぐ人はやるあとことよめり神武紀のいふ阿太養鵜部の名地

あくこと　他字異字なことよめり日本紀に海まと餘字波もよめりあくこと
ふなどとうりしハ河の脇けをあくとよめりあぐとよめりあぐとよめ
ぬあぐなとあぐなとあるとも見しあぐし
波乃山も詳なるずとうり名寄に伝法なる名をとうりけるとう

あくひ　直字とよめり物に絶といふし當易の約てかなたし字書に真準
當とうりて延喜式に估もよめり價も同し〇姓に直をあくひとよむ
も同類なるとして日本紀に費直とうりて又あくひとよめるも當得比
用ることを訶へし事あるとうて三代実録に費字をとうり〇姓氏録に直者謂君也とうハ宜汝
為君治之とあ詔に就て注せるあるとう

あくふ　與とよめり神代紀にうけふとうりしもよめりハ寸反ふて直比氣に無
ふ〇万葉集にあくふとうりハけふとうりハけふとうり
あぐめく　日本紀に放逸とよめり拾遺集に如比とうけふるめぐけふ
めぐぬとうりけふ

あぐへて　源氏狭衣あり　ひそまぬ　ことをあぐけと同義なるべし

あくとし　古事記　日本紀　惜字とあり　新とあるとしもあり　惜しけ　なり

たくと人　あくとくあたらしいあり　○　なりなるし　新とあるとしもあり　惜しけ　なり

あくとしてあり　命を思ひくんよりなりぬへき身を

あくかも　万葉集　捨とあり　当哉　此歌し字書は適当之辞と

あくとり　信濃　いちやうどれとし　或ハ宛とあり　ことぐらと　擇す詩の注

坐見貞　とあくとり

△あち　書紀　天思兼命　天降信濃國阿智祝部等祖　とあり　式伊那

郡阿智神社大とあくとれ　此条　東小昼神　とあり　邑　阿智川　延

喜式　阿智駅　免課役　とあくとりしとあり

あぢもひ　味字とあり　味ハ助字　そあぢとはもとより可美　此条

う酒　反　ぐう反　○　神代紀　教　あぢもひとあり　味ハ道　あり

それとあく　味ハ教　とあくへしよて　無道　あぢきなく　と訓やり

あぢもなし　日本紀　無道無状　ホとあり　无味氣　とあり　伊勢物語　あり

古事記　味字　とあり　史記　毋為遊仙窟乃無情　とあり

ヨ　後世　奇　よりむハ　とあり　後漢　とあり　味　とあり

多し　慧字ハ字　とあくとす　○　拾遺　味字　とあり　○　神代紀　味字　とあり

△あつ　充字　当字　とあり　○　諱　敦厚篤淳　とあり　又三

浦義同　とあり

あつし　熱　又厚　とあくとあり　しハ助字　とあり　熱　とあり

とあくとあくとあり　源氏　竹取　とあり　集　とあり

とあくとあくとあり　源氏　竹取　とあり　集　とあり

つ　梵　火　とあり　とあり　○　蝦夷人　此衣　とあり　此　とあり

遠　とあり　あくとあくとあり　○　神無月　此　とあり　とあり

いよ　見　とあり　此　夷　名　とあり

あつむ　集聚　此字　とあり　あハ　変　とあり　とあり

拾　とあり　同　あつめ　とあり　とあり　とあり　とあり

あづく　預　とあり　與　音義　同　関　干　同　充　附　此　義　あへ　とあり

けるもいといづくにか今寄宮はたとよりて寓とも見てとり目已よ
あづかりとうむも同しかるべくなるべくあづち　倭名抄に射塚をあしつちとあり編生はたなるべく持統天皇紀
時射とあるべくとあるを築とし見る事日本紀に見えたり埃襲抄に堋とあり
あづち　延喜式に束草所謂阿都加と見えたり束草とあるべくあるべし
神代紀に青草束乃とあるを佐に敷と
あつえ　持統紀に遺疾弥留とやまひあつえ熱困の義なるべし又あつえびとも
先に雄略紀に遺疾弥留とやまひあつえれとも又あつえともあるに同
義なるべし源氏物語にいつまでもあつえとあり平家物語
に入乃おそれとあるに同義なるべし
あづま　神代紀に東国とあり吾嬬は義日本武尊は故事に出て景行
紀に見えし吾妻とあるみしとあり日本紀に見えたり○日本紀
に見えし雄略紀に雄日坂より東とあるに出て東諸国とあるみめと
あり吾妻郡にあるを流と名義川とす古事記に足柄坂に

て此事と見日本紀略に廃相摸国足柄路開筥荷途とあり方言第
にあづまみ坂かとあるもあづまとあるかも
とあるも此方言とあるべくあるべく号其国謂阿豆麻也とあるに相摸ぶんら
あづらふ　誂とあり日本紀にあづらふとあり又謂とあり誂とあるは
義なるべし説文に相呼誘也とあり今は倭語に事と紙とあるべしとあり
いづらふ　日本紀に悶熱悩痛汗流なとと訓とり三代実録にもあり熱とあり
ゆかひ　反切に熱とあり倭名抄に噯とあるも暖氣也とあるに同義新撰
字鏡に暖とあり○源氏物語に浮世とあるに家花物語にもあり
いづらはしとあるに此物せるなり世事使用に撹字と譯せるに倭名抄に扱
字とあり○あづかひ事も万事とあるべし
あづし　神代紀に霊運當遷とあるみ顕宗紀に羸弱とあり熱癡に
疾此危篤とあるに倭語に源氏物語にあづしくとあるべし
あづまろ　倭名抄に多鄙とあり東人此義にあづまろとあるべし
此男健めして事指ようしきに古語に見えたり○後紀に是東人也

常に云く額に八箭八立とも背ハ箭八不立とそ君と一紀と沼て護物を方
系第に有る昭あづまとはたれ八ぬむひかつらんをそていてみる健きいくさ
と祓ぎたまひとそんてこそり
あづまや　倭名鈔に四阿とあり此方にはかりしる所造れ体
といへとそり續日本紀に御四阿假殿とあり八ぬ方に壁なれ家しとも
とり屋例に局部屋四阿屋棧敷あしやしべとり俗馬場にあづまやれま
やしとり相州屋れ家又東屋れ家とてそ初め東国れ俗に出ーといとり
四阿八周礼左傳ホにそうう逸周書れ俗に宮廟四下日阿とあり○四阿
山八信濃高井郡にあり日本武尊れ祠にあり各に弟橘姫れ祠にあり
あづまごと　倭琴といふ源氏物語にあづまごとりもとり東琴は家し
い東八西に対せの例なるへし紫琴ーひくていまはしし○源氏に
づまこと琴も立てとりたるやうなれ俗れみ琴ひうもまれんたつ
うさとめとに八人れかうはちすとそふもそれたやとそうとそあれ
為に俗れ琴に東琴を結の器れ上に垂とそんとり○上代に東琴れ

結とそ琴に小必を女れ鈴の方にうり舞に琴とあるへて其と弟に支婦れ中れ笑
とも事にりーまや古事記に天詔琴れ用ゐて又吾妻れ家も此物なるへくやと
お居氏れ源に西に支婦れ同れ物合に琴瑟を調ふとに琴とり
あづまうこ八　東竪子とも事り日本紀に東方儐役者とあづまやうべとい
るに和ーニ子れ用をとり代に同名をとる事古へ上れ例に仍俗
りにり
△あて　名名伊勢物語に高貴家とあり枕草子に八伊勢
物語にあてある人にてある男蜻蛉日記にあてあるかに源氏にあて人あてき
家物にあてれ法とそ事にれ用めあるあに嘆美しき語なるへーたへて
し一説に上手せうに及あに○日本紀に質とあてにあり礦も同一彩
概字続訓図ー史に不足以當補質とはるとそ今もあて物にもあて塗
ともとりあてにあるに俗語も見より出るり○材本にあてれ方
とい云日れあてる方に為りてこ為に本にりにみにこ対あり○
いくつあてとりあ光れ家行に代の家に直をあにとそむ

れはうまりこの国にて又擬字れきたり○腹巻のおりあてはり大諸礼り
又ゆ○多系集りはてさるぶとはかはハ抵當不安れ系なるべし○浦ゆり
はてびとはの国も貴ぶれ系なるべし
△あと　跡とあり足處れ系なべし霊異記は蹤又躅とあり新撰字鏡
よあるところとよみ神代紀は脚をよめり○後をよめるハ誤なり
○日本紀は例をよめるも系同しはとふるそハ依例れ謂し○阿堵ハ俗語
れ這箇しはるなし○世は三跡といふを小野道風藤原佐里藤原行成
なりまハ書跡とはの○佛足石の哥はみーはところと又ゆ
あど　伎人れおはをはの宗鏡録は如楞伽経偈云心為工伎兒意如和伎
者とよんこり今もわどうろとゆり新撰字鏡は誼議を訓り彼此之心
相知貞と注り拾遺集り
さはをはいそ御ちうさそとわとうちてなやそやといふ人とゆもり
○小兒ちれ慮智ありて事をあるとをなどるいとはも国系ありべし一説
りはうちを脚しれ結跏也とはび又世俗はとるる阿堵れ系とはり○

あどあれはあはるぬとはふ俗語も亦伎系なるべし納来とはとるとはも国
はとへ　日本紀は聘とあり相同れ系なるべし
又誘字をもあり誂は同し履仲紀は誂とはとあり○新撰字鏡は誂を
はふはるとあり
あゆべ　神代紀は脚邊とあり之字の代わし○倭名抄に名及古跡は跡部はり
見物は獣れ跡を追る者をて万葉集は跡見とはれ伝は逐人とるとり
はとるは　万葉集は浦いくとはとはとは

あそうぐう　後撰集に河海の注に宮を宮ハ宮殿なり
ぐうとよむ　ぐうとは宮を宮ハ宮殿なり
いとおしでる　因幡なり
あそうぐう　方丈記法華経を安置
卿以無端事仍對言得實必有賜　とあり釋に今世何々歟とあり
△あるを　古語拾遺に古語事之甚切皆称阿那　とあり嘆息に通ずる
また神武紀に大字万葉集に痛字とあり注に阿那阿波とあり○
名とあるも大字持と定れ或に大名持に化とあり大巳貴とあるも名あり
特に○御名未詳とあるも○穴とあるも孟子に盈
科とあるにもちてとあり和名鈔に孔竅とあり又
窠院も訓せり○齋宮に河に宮殿園とあり宮殿園ハ塚穴とあり周も周殿なり
あながち　強字とあり痛勝に強とあり
いたづら　日本紀に軽字とあり痛に通ずる
あくいたづらとも　とあり霊異記に蔑新撰字鏡に侮又戲とあり

あなぐら　日本紀に考覈撿覈とあり新撰字鏡に檄
とあり字鏡に世とあり○あなぐらとつづるもゆしとあり抄
△大索とあり遠書に大搜とあり大搜又清和実録に
と人とあるもいたくいたむ痛切とあり穴窖とあり今
あなうひ　倭名抄造作に具に麻柱とあり大府記に立麻柱人車記に結麻
柱とあり○いたむ足に足古に足代に事に
足一○後日本紀の宣命に弥結に弥並に神並に今に足代に事に
ひとり　扶けもとあり倭名抄に楷柱麻柱と並に○義和
紀負観紀に王臣等に共奈比拳相扶拳とあり共に○義和
に共に穴字に誤あり
あなうひ　日本紀に姸哉とあり痛に笑やに古事記に
とんとんとう
あなかしこ　初紀に畏とあり簡牘に畏とあり
神代紀に惶根尊とあり吾屋橿城根尊とあり今に女に河に

おもつくゝ沼のうり万葉にいかしたれかけるも同し

△あに　兄をあるあにといふ又あゝかゝとも云こゝろ○豈おもふこゝろ八非然之辞なれ共語なをしとゝ東国人八なをせとゝ字書ハ詎豈也とも云こゝろ此語ハ二例ありいかゝ此邪ん也とゝ八豈何之義也神代紀ハ豈欲還故郷欲百年第ハ豈不益欲與嶋守とゝ八詩周南注ハ豈當文王朝會征伐之時羑里拘幽之日而作歟史伯夷傳ハ豈謂是耶李斯傳ハ豈少我哉とゝ文選注ハ豈同謂豈不同也とゝ八ゝ歟日本紀の宣命ハ豈障事波不在止念天太宗毛とゝ八ゝ歟日本紀ハ何柘とゝ八ゝ歟胡三省ハ通鑑注ハ豈とゝ也とゝ八ゝ歟推ゝ歟ゝ歟ゝ歟ゝ歟ゝ歟ゝ歟日本紀ハ何ゝ歟ゝ歟ゝ歟ゝ歟ゝ歟ゝ歟

的意味は推考の如く却てうるはしき事なり

いせものがたりに、はるかに海をへだてゝ、ひとしほ日数をかさねたる

此郡也野村の安法寺造、同あり儀式帳の安法縣造真葉枝とあるは同

かなへ一名を窓蛍ともいふ近衛院の時の安法造葉道は真葉枝の裔なるべし

○桓武紀の授伊勢朝臣水通清連は伊勢の人なるべし○東鑑の實朝公の時朝

雅の伊勢の入道の造る岡負車の墨を作るといふ安法弘法にして其墨を

うるべし

△あく　栗をいふ淡しと記せるかなへしなれども詩に米はもとより淡しとあり

又米をとゝのへ米を稲黍稷稗麻豆名あれども穀と五穀之長といふるなるべし

弘仁中の一莖十八穂の嘉禾は米也○倭名抄の粟米をば

うるもちとゝもちとあり大あわなり又稷はうるの粟なり秋に霜の降る

苅を霜粟といふ○河海に也粟米や安房国も古事記の東之海とあり

阿波国名記乃岩戸しるしの名なる事古語拾遺にあり○河海に也

いはとはの略語と異之集海氏本にはいはとあり遠とをくとあるなり

とり又はいそやともん嗟嘆のことゝ也

あづら　はれすゝきはいとゝとり翻梵語に養婆羅者此云空とあり新撰字

鏡に樹枝はづらとあり

あをれ　日本紀に可怜とあり憐愛なとあり哀くとも嘆くなり

うらくしむとあり也とあり

らうり○古語拾遺に阿波国名記に天晴れ家とあり今は

つゆれとあり也とあり通俗は造り宮と日神の御殿を出さまひて常闇の世を作る

なりしより憐愍をあらはす天照り物用する河なるべし○あれそれは社は伊

かなぶ伊勢弘市弘村より風土記に淡海園杜神樂神とあり○いはれ堂は

山城国相樂郡千童子村より平重衡家の傍の寺なり

あをす　神代紀に并又配字とあり男女配偶をめはいすとあり

神代紀に妻をとあり

埴囊抜に掛字を用ゐるとあり○勢力食戦の家はかくのごとくなり○薬又香をも

にいふも西土に合薬合香をもとゝ○書冊に樂合と称するこゝろなり

ふんこう冊ふまなりうこうはうは詞なるべし

あこち　淡路ぬ宮ハ吾耻ぬ宮なりこう書事紀ふんこう二ゐるみとぬまぐ
こひしてそ子とをしめこう初めあがいかくいこうや人の禽獸ふ吳なるおもまこ
耻と初て欲て縁まこにせこんにちこれと阿波ゆへ淡ゆ海ぬ社ぬ宮ふこあ
こう山遠ぬなこいふ同しこもいう

あこあつ　延喜式源式帳なこに畔放とこりけぜとこあちて田ぬ水と乗ら
をいう

あぐらや　倭名抄ふ亭とあり人やとぐこ又伊勢物語ふあぐらこうる板
敷こいふもいここ○今荒屋こもいうなぐれこもいう

あこうこ　日本紀倭名抄ふ臆とよめり俗云ぬここもふて新撰字鏡ふひ
ざがこぬありここふここう○同ふ鍼ふ針こなりこと訓ぬり鏤也と注す

あぐたし　鎮火祭祝詞ふ吾とんあらこしぬひつこんこうあぐたしこう
乃ぬなるへし荒ぬここあり

あぐらゐ　俗語ふ胸骨こいう阿鍵羅訶迦ぬ宮なりと親するふ拠とり

△あひ　相ここありなここぶこひこう略して互ふ合ふここりこそ万葉ふハ
相こあひこもあり詩書ふ番ここむ相ぬ宮ふ同し厮ここむハ俗俗く○間隙こ
いふあもひぬ畧なへし○倭名鈔ふ椶擊こあり俗ふけあひこもあひこもこ
いふあ人こあこかあここりなここ逃擊こいふく日本紀ふ鎔道こけひいく
せここああもいふぬなるあや手ぬ物俗ふ鎔會ここぬあひこふり曲れふ相
ここここここみ謂送粉聲こ注せるぬかこう

あひむべ　令式等ふ相嘗ここりけひむべここむへし公事根源ふここりひあ
ふへ也中ふなここふ多くひこいう思ここくハ神嘗大嘗なこの同ふ行ハれここ
間嘗ぬ宮なへし相も同ぬ宮なう又公ここハこ俗神こ皆祝く祭りき
めここりいう祭今ふ季秋神嘗祭仲冬ふ上卯相嘗祭下卯大嘗祭ここ式ふ
我ここ宮七十一座其社ぬ神主各自ふ官幣こ受て祭る也後注書ふ注ふ
正祭外十月嘗稲等謂之間祀ここここ○九月神嘗祭こ相嘗こ記せるなり
桓武紀ふ延暦九年九月奉伊勢大神宮相嘗幣帛こ見こ中右記ふ相嘗
祭供當年新穀事也是神令食新嘗祭同儀之故也こここ今義解ふ新嘗

謂嘗新穀以祭神祇也朝則諸神之相嘗祭夕則供新穀於至尊也とゝあり

あひだち　凡そ神社は皆相殿なり儀式帳は同殿坐神祢相殿とゝあり神代紀は復勅天兒屋根命太玉命惟爾二神亦同侍殿内善為防護とゝあり西土れ書は神侍といふ是也

あひまひ　相生れ兄と相むかひれ小姫れ小松係るとゝあり○相生れ松武義多義務云ふ相ふり雌松雄松とも高さ七間餘也

あひおい　古今れ序は高砂住吉れ松も相おいのやうにおもへとゝあり相おれ兄と

あひぎく　万葉集は妹背れ兄弟朋友れ親みをびとかれ奇とゝあり栽さる物を相関と記しとゝあり宗かは文選曹子建與吳季重書は兄弟古今集は男女兄弟を妹背のなかとゝあり乃ちを妹て兄弟朋友れ奇は雜物は入れとゝあり

あひあふ　相対れ兵軍中は用ひ西土は暗号とゝあり日本は天武天皇乃軍とゝあり太平記は敵討れ時同じく武しとゝ答へと約束れ名とゝあり

と宗ひとゝあり是とゝ○返答は答ひとゝあり同答とゝあり

あひたけびと　日本紀は共食者と訓ひり相宴（ウタゲ）人れ義なるへし宴とゝあり

よめり今相伴とゝあり對食れ義とゝあり

あふ　隔てゝる物れあるは會も合も逢も相も間も皆互ひあるも

又逢著して合交せるれ義とゝあり詩は相逢相値且衝盃とゝあり人おもて

ゝ前

ゝ嘗とゝあり○續古今集は逢坂関とゝあり○饗は日本紀は安武

なりとゝあり○饗は日本紀は安武

饗と訓はるも饗とゝあり○源氏物語は饗とゝあり○倭名鈔は

物せる物なり○職人歌合は小力は力なるとゝあり○勢力は力なるとゝ

あふもはれとゝあり○勢力はちからとゝあり○會別れ

始とゝあり諺は文集は合者離之始とゝあり○會別れ

いつれは辛れはとゝあり○會別れ

あふぎ　扇はあふぐと体は同なり扇はとゝあるも西土は扇とゝ

とゝあるは班婕扇は扇とゝあり優遊とゝは國扇也

今此扇の八月年こより造り始めり通雅に摺扇起二于東裔一而盛二于今日一といへ
ども なり今舶来の摺扇象牙を紙に貼せしものなるべし遵生八牋に象
牙桃枝扇とこそ通鑑南齊の胡注に腰扇今摺疊扇也佩二於腰間一故曰
腰扇といへり○埃囊抄に蝙蝠の翼をもて骨ひろげたるを扇とかいへりしかの
ごとこれり○續日本紀に渤海國王に拱御扇十枚を賜ふとあるこれは蒲葵扇
なるべし方言に東人多以蒲為之嶺南以蒲葵為之といへり今も琉球より来
もれり○倭扇は檜扇初めなるべし日本紀に應神の時に百濟の人来朝
殿扇とあるは故事淆に後三條院儉約を事とせられし御扇は骨檜にて薄
く造て持たまへりしとあり游官紀聞に宣和中高麗貢二松扇三合一といへ
ども なるべし宋鄧椿の畫繼に倭扇以二松板一為二面指一許砌疊亦如二摺疊扇一者其柄
以二銅鏤錢環一子黄絲絛甚精微板上畫二山川人物松竹花草一亦可喜とあ
へり○續日本紀に以二年老一力衰優詔特聽二宮中持扇策杖一とあり○
拾芥抄に紙をなまめかしくもあるかなといへり

ものなるべしふくげし河海に檜扇は女方は上三枚をつゝ落ちそへてみて多
は木をもてこしらへてあるべしもしまたは木にても同じ風なるべしといへり
守覺法親王の記に冬用扇事似二有禮一法但冬用檜扇暖暑之須用蝙蝠事
尤宜之又按冬扇而用蝙蝠之人可有之歟蹴鞠之藝堂迹とあり○杉
目扇又あるべし名くるもの女の扇にて縉紳家幼弱の時にもとこれり又三十
九枚とこれて胡粉地にして彩色す其柄にはこれ糸にて楠松梅なとこれ勝
花と貼べし○小とは物の朔日近衛兵衛四府進御扇事とあり○
五節にすき扇といふものもあり○今こゝにいふは束廣
下合上開くものの紙にて本式は骨七行也糊をもて紙を貼を中啓といへり
十二本骨なるも是を公卿以上は妻紅也とて夏は蝙蝠を持冬は檜扇を
持ものいへり束帯色目には束帯には檜扇を持く衣冠直衣等には柄極
熟には蝙蝠乃扇も納すべしもいへり中山繼は折腰扇とあり○扇は
是をいふは女房かたは法師なかへてをもり或は檜扇にてすと定
めるべし扱又名目は是をもすべて祇和をふも男子は笏の下を女子は

扇と用うる也守覚法親王記に扇是筋代也と云ふ○源氏に扇ぶかりとあり〜和泉式部に記よかる人氏扇を云かへてと云〜こそ西土にハ吏婦の扇なりとは扇をうちうふ子令歌扇辛もいふ東坡が詩に摸扇惟逢春夢婆とぞ春夢婆ハ女性名なりとそ○扇に折かく事物に見へこそ骨に〜信實乃記に見へこそ○昔ハ餞別に扇をつかハせ〜中源氏拾葉紙新古今集に見へこそ〜きまり扇を人にやることを云〜後撰集に和泉式部に見へこそ○ハ班婕妤の扇事によりて高き高きを好ふ行ふも高き人氏なるへしと云ふ神中抄り

名ある扇をかくしてをかくなそもかく扇ゆしと名付そめん

○秋扇も白文集に班女閨中秋扇色と云り

○さし扇ハかぶとの外障に出名にて体に似たるを云ふ○法本第り

ぬりすてこそこそ西〜ハ鈴鹿山扇に風の吹こ海〜やハ

ぞ名を伊勢の鈴鹿那とあふぎに那とかけるなり○今人初見或ハ歳首又ハ冠婚に礼にハ必す摺扇を用て祝賀に要物とす末廣に佳名なるなり○蜑藻屑に檜扇絵綱公卿ハ廿五の橋殿上人ハ廿三の檜蝙蝠扇檜六撥別當大小弼廷尉持之十二橋常人持之猫間骨大臣家物也と云又十五歳以前に人ハ白や杉に扇を指と綾杉ハ黒き杉に赤くしたるなり○皆列宇治山田に茅葺に用る扇を云ふ○製ハ蝙蝠扇よりして地質素に赤く○摺扇に杉や骨に少し地紙を殘せ〜と指寶物に彩扇と貴人なる時に用ひてなるに赤くいふ寶ハ折摺ひまなし○凶事には無文扇を用う表裏花田色とぞ又黒檜を用うとぞ常に地沿多寶塔に供養り扇ハぬり骨に紫ぬりて作るべき法文を侍従大納言かきたりとぞ〜檜中に扇合に沈香に黒漆に細骨のこけたる紙を貼て紫房に要文を書て出されこそ〜もるとぞ光〜と凶事に黒骨を用うるハ忌游宦紀聞に黒に煮貫を烏竹骨に〜り○武備志に泥金扇をこかひ〜ぎ

泥銅扇とをくいのぎと譯す○平家に舟ぐさは日丸に扇を出すとは故實と
識す那須與一は射とりし八藝はさる事なれども日を向ひらをに入へき事とは
義経の絵をとくせどもなほ出よをとり○扇流しは源氏物語に出り○こがね
扇といふは塩竈にて造りあるなし○ちづめ沙りといふは玄貞に東國陣道記に
時をはかりて扇の箱根山にはをまてもなかをちつめれ
○扇は竹に焼杉を用ゐは凶事なり喪中は紙を用ゐるなり記録に出り紙を
をと薄様とをそ○扇の芝は宇治の平等院に有り形は自然に場に形は
左右を企るや私憤に出て大義を忘るるなり○平家物語に僧
事高倉宮に出て忠臣鈍つへき事源金吾に譯し
あふぎ　沈とあり左右相蹈は多くは桃華蘂葉に鐙は壺舌長半舌と見へたり
○武藝あふぎ伊勢物語は奇なるあり新猿楽記に見る木鐙は今は世五
六寸にはかなくし○今作と極る鐙は大坪道禅は作なれ軍義満公は附の人と
○花肆に出ひらいぬぎと極るは曲跋し

あふり　倭名鈔に障泥とあり熊皮は五位已上は著るなくあふつと体に出るを
よく驅るとあるとをいふ信に出るは風をとはは同し詞なるへしとは○
り出るとは行をとは行なるとは障泥とはふく○新撰字鏡に鞦とあり
とよみ弓弦とは注せり○相撲のあるはあり
あふこ　倭名鈔に杖とあり杖名とは注せり新撰字鏡には杖と訓せり
はけ　拝は美なるくし鈔に多くは垂れとあるとは杖にかなふ例あり負木
は美なるは今は俗にはどは出り山にはこは輙擔荷おごは區擔地とは平治物語に
竹杖とは竹は人てんびん棒なり○伊勢物語はあるはかと
みを一なるはあるをうとみとうんとは成はうんもうんとはもむへし
あふひ　葵とは倭名抄に向日葵は文は葵傾葉向日とは仰く日は葵なり
新撰字鏡には葵とはあふひとはみ菊とかはあふひとはあり松花紙はあふひ
はうんえとは雪は集は傾心向日葵
君とはあふく心とはうくはあふひは草むは日かけと指てとはへん
○かこ葵は用ゐは用ゐくは文は二葉草は草

とをいつり杜衡と杜葵とをいつてもよし吉記に治承四年四月十五日賀茂下
上松尾社司献葵桂如例とゝゆ
ちはやふる神代をうけてはつひはるみは二葉よりやそふらん
支本第五師光
そちうしたうけれ山のさくら葉はみわもれもるゝ御蔭
御蔭山と日影山とゝも御生山とも二葉山とゝもいふ榊を御蔭社きゝ海外
月賀式みわを乃宗にて午九月八御蔭山神幸九神事く西上九禊九ゝ
○年中行事賀茂
神ゝれあふひとはるそ世ゝうけるさくらをかゝゝ初りん
宗武紀もうらとかゝゝ事とゝみれハ中古ゝ事にしと
ゝ○かゝ
をゝれ調ゝる
ゝゝ
又かゝゆくまそもゝくゝ
ゝれ者第八松葉帝ゝ

枯ゝ
ゝ
たく諒闇九芦簾ゝ
あぶら　膏油をゝ和名抄ゝ肪脂もよあり草本九実鳥九肉をゝぶうて
ゝ名ゝ
ゝ九
ゝ
ゝ
ゝ

○紅の袴とは日本紀なとにもとあり源氏物語にもあれとも
さもふつゝはいとりあふさまとかくもかくもとかくもとかくも不溢也といとり新撰字鏡に渋をみちはふ
ふとあり溢也とこゝゆ

あぶらわた　倭名鈔に澤をあり釋名に人髮恒枯悴以此令濡澤と俗
云脂綿二字を用ふといとり○今按に油綿とかくこゝは寒夜に節會等に
丁子に油を浸ひたり面及手等に塗ると也

あぶらすり　倭名鈔に羹鐙肉とあり○武士は騎馬出立とゆゑに泥障
とあぶらずは但あぶらとは苦しからずといとり泥障は毛皮をもひ
鐙磨とは播磨革はまるを也とゆふなり○註に鐙磨とはいまは鐙磨
障とゆふ物はなるやといとり○堀名に鐙磨とはぶあるとゆふ鎌倉にあり考古
はは濱より杜戸にあるゆゑなり

あるさまなり　文選に左右とゆみ和語事類に注釋とあり又縱横をもむと
をいとり八雲抄に注するもかくするもはさまりと宣とり又はなをなるとゆふ
変なりともいふなり

あるあるゝ　伊勢物語はうとうとはたゝとり真字に隨分は字を填とり源氏にはなを
なけはなはさまへはとあるあるさまやはさまひはんとはたゝ意はなくもとはと
いとりとゝといとり六帖にはもはは可をあるはありひとはゝとりあるはは似合ぬあるはは
注分は字かるひて文ゆる也をと他の死人と思ひてあるはゝとはあるゝ
なるへゝ委ゝゝはおの物はゝとゝとり

△あへず　日本紀に饗をとあり又あるはは遇待はとゝ○今合はるは
はとりはせ及へ也○伊勢はは物名所拜を和名抄にはとゝと記はとゝ倭姫世記に
敢とゝゆ讃岐は名多配をとゝとあるゝ

あへて　敢をとあるはたへてとゝとゝとりをぶかとずと譯す進為也と注とり敢告天
地之神をとゝゝゝゝはゝとゝをぶかとずとゝとりをぶかとずとゝとりをとゝ不敢はめへて行せをとゝとゝゝみ
敢不はゝはへへ何せざるんやとゝ上はの例と又肯をとゝめとり紙はるをとゝとゝとり
可也と注せり

あへず　茂樹の歌集に不敢とゝゆ不敢は不果と不果は十分あるをといい
ゆとりとゝ万葉集に不勝とゝとりまゝ縫將堪とゝとゝぬひはんとゝとゝとり注

をなへぬ船まかめくをたをひめくをかあくを言ひくあ散めくぬをを言て
めくあ　物はをろき事なり河海は無敢はをとり
りくをろ　源氏物語に見えたり饗れ宴をらふ及ると今ひらふとも
をり法師苔むるあ或ハ會釈を譯を遊仙窟に盃吞をあり○畫家にあ
ひらをひハ粧點をり假山をとあひも同し
○あが　播磨風土記に出雲國阿菩大神といふまて大和國畝火香山耳梨
三山の相闘を諫に来りたまふ○大和高市郡に阿保山ひり万葉集に見
今阿部山とよへり○伊賀の地名に阿保ひり阿保親王の舊跡ひり嵯峨天皇
乃皇子也今に氏姓にあり天德中に國懐介阿保懐之ひり小野通風と名
と齊名なり　続著なり
あひあく　蜻蛉日記に賜号はあるまあ〳〵ふせらをぬと見ゆ　大鏡に
語にる宇治拾遺物語ひあ〳〵と同語に
△あま　天をひまとも云ふ日本紀万葉集に見ゆ
めをみの物語みて蒼海はをめへ○海人といふを海より將〳〵ふる葉廣

龍戸なといふ見く日本紀に白水郎をとあるハ白水ハをと地名即ハ漁即はをり
崑崙奴乃類をそ水より流むより代醉編に見えたり○南海記に樂蠻以舟爲
室蜑有三一ハ爲魚蜑善舉網垂綸二ハ爲螺蜑善没海取螺三爲木蜑善伐材
木とあるをり○尼をつを釋日本紀に梵語也とあり名義集に阿肇此云女
母とををり日本紀に阿尼とをり阿尼も漢語也一説に阿嬤とあり三
藏法數に梵語尼華言女とも見えたり○尼に位の名ひるを後日本紀に法
均に進字大夫の尼位を授る見え○尼將軍に北ハ頼朝は室ひあを松下
禪尼と称せハ小條時頼の母安達氏に○文治の比京壬生に乃尼に尼はを
を尼をるひり大事り胸を食りるを怒ち火をえ出て趙子を焼をせ〳〵り
宝亦の日記に見えたり又正元元年に一条壬生に小尼ひりて死人を食ふ事
百條ありて文和二年に京師尼ひりて連りに小兒を害する事数十人をりも
園大暦に見ゆ又三河ものみとの里に見えたり尼ひり或ハ霊異をりて崇仰し
或ハ奇怪をりて伝文せをとをとあるを見えたり或ハ霊異をりて崇仰し
注船を病て後月を累ねをを稔て尼食すをとも行住平人をり絶をはをま

一滴を垂らさるより近年五千餘冢あて分まかりぬ死後送葬せさるもの三百あまりも変態を見る奇癖といふべし

あまろ　俗でいふ新撰字鏡に餃子もあり天足のためと反まくるあるは天の常道也○口語にあまりけりとくるをはまりかといふをまりといふ也

古今集より

いふいくかりへやうさき八千とせはけまりをくしさき君ら千代をとも

あまくと　真字伊勢物語に多をとみ霊異記に数をよみ万葉集に数多をよみ

光り餘手代天之日本紀に数十里代はまくさくさくよみあり○俗語にはまこ

ちろとの神詞にはり天津社乃系つやなたり

あまひ　神代紀に如をよみあり古事記に木華之阿摩比能微坐と云へり

はちは寛平熟田縁起に日本武る随逐水時年三十仍号其瀬曰能知

瀬能知者命終之詞也いとるとまる

あまり　霊異記に甜を甘をよみあり味の俗もるをあまりと俗にはまこと

いとはも甘の字を書るとあへり○俗に鬢のあまひ紀なと又器物の

蓋あと緊密なるとをはまりと云ふ淮南子に大徐則甘而不固とあること

又はまの事を云ふを詩經に盗言甚甘とあること○雨師もあり大

和吉野郡丹生川上神社を三代文徳実録に丹生川上雨師社に作る

雨師の字東都賦に見ゆ新葉集に芳野の作に雨師乃社へ止雨の奉

幣使をとあること多し後醍醐天皇

山里は丹生の川上雨ふりて岩根の松の色まさりけり

あまぐも　元亨釈書に雲霧をいふ霊異記に見ゆ万葉集に作る

ぐもりこもりつるあまとも云ふまさしくも見ず天霧相とあるは雨なり○西

行談抄に人丸の歌

梅の花それとも見えぬ春の夜の月かすみかくれ雲にまがへて

とは月をいふなり

あまびこ　虚空にひびきあるものを顕昭はひびきを同しとあるあまびこは

高雅の山のことなり○倭名鈔に馬陸と訓せり今いふ蚣蝑し新撰字

鏡を蛹と訓せり和名抄に○松浦郡よりまゐる丹生川上
あまごひ　雪をあり雨を比天西土にも請雨とよりあまごひさせる訓せるか
東見記に見えたりあまごひ　○祈雨は祈晴の黒馬をもって祈晴の
時は白馬を用ひ小山抄に祈晴は丹生貴布祢被奉赤馬と見えたり
基長々
神垣に引殆は毛の長き毛を垂れたるを丹生川上
あまがみ　春雨鈔に天兒をあり源氏常夏に撫子の物語に
乃天鈿女命より出る名を列仙傳に東王公は摸像を天兒を
よめるはやまとより東王公亦曰東王父仙傳拾遺に東竪子を摸
すともいへり○城陽寺に遊る舞妓は面を遊る肩と胸とに竹筒をあて用ひ
護身符を入れ源氏の物語に三月の末に見を負すとて
あり尼兒ともかあり今世は這兒もいきもとよりて○禁裡の清涼殿にまがつ
とすれば清涼殿の日中に物を小見えたるを見るべし
あまそぎ　喜撰式に若詠高峯時あまそぎきりとあり同式の本文にはあま

はそぎのきりかげとあり天退のそぎや○源氏に垂髪はまくし
はかり紐をは尼にそぎたる乳兒をとり昔の尼にそぎ額髪をそぎたる
をいへり又さげはかりは今俗にも女兒をいはまもをり
あまづら　倭名鈔に千屋藁とあり式に甘葛煎とあり式
大饗にも用ゐられ和名類聚雜要にはあまづらと一名藁蕪あり甘
葛にはすなはちあまちゃ又小がくまともいふ土常山なるべし新撰字鏡に
藉とあり見あまちゃとあるやとあるや蔓のまちゃともいふ甘草藤とあり
甘葛煎は薫物の方に入るものと伊勢物語より出て事式に見ゆ西宮記に引茶甘
葛煎ともあり
あまくゆ　直に名を尼眉とかけり半部經代にくゆ同じく皆ひとしかり
但尼眉にはあまと末濃（スリコ）の下紐をかくとあり
あまえるか　源氏常夏にあまえたるとあり或は驕とあり今も兒女子は和歌をも
て人に媚ることをいふあまえるとあり新撰字鏡にも十訓
抄にあまえたるとあり甘葛煎とあるとあり源氏にはあまえるとあり

あまさへ　剰とうたり俗ら副の字こゝろ也撰集は国月はるまとはるこゝ
はりてめべき年ごろもとうたり一先生の説は剰はあまることまでよてなるの
さへの字のこゝろ也俗語と解せるは誤り
あまてらす　天照とよたり万葉集も安麻泥良須可未と有てるを延てて
らすこゝろをたくすこゝろ也○三代実録は基経公を太政大臣は任
こゝろの宣命は朕ら食國を平けく安く天照し治め賜へしめすと准て也こゝろは天
皇は天下知しめすと准て也こゝろ
あまさかる　夷の枕詞は也り日本紀は天離るもか
ゝり天ひるは天の字こゝろ也ゝ作り帝都は遠きかるは也
いなみはぐこと　神代紀は天探女は事をかくこゝろ也を略して而
金剛の如きこゝろ小悪鬼を縛り降ぶこゝろ梅村載筆は天は邪鬼
は略を語こゝろ也毘沙門は也毘沙門天像令身被
金甲而足蹈女人之肩或云乃其母也こゝろ
いなのり　天少女の字天女をこゝろ又天は天こゝろ也こゝろ撰拾遺集
はるの

若し世の天は地とめ其ひかりひかりぶるこゝろ也こゝろ
梵書の故事也或は如官と訳して也り○万葉集は海女とも海人
人は海こゝろ也
いなみはぐや　神代紀は天羽々矢と弓は弦を割て金羽二枚を入てこゝろ
矢四羽なりこゝろ也こゝろ天羽々矢こゝろ
あまたこゝろ　三代実録は京事紀事代主命の天逆手こゝろ
もこゝろ也こゝろ事は其疾速を称せる也
伊勢物語は天逆手は天逆手は須退くは逆手は逆手は打こゝろ
逆手を用るこゝろ如へ〜は撥手は逆手は天こゝろ人を呪詛こゝろ
逆手を云こゝろ也こゝろ海人は海人
○あまたこゝろ逆手は打こゝろ也こゝろ
肖史は海人のかこゝろ海底へいこゝろ也こゝろ
あまつひつぎ　神代紀は寶祚又天業とこゝろ古事記後日本紀は天津日
嗣は俗こゝろ新拾遺集は御製

世と物ごとに民をいたぶり涙ひるに天狗ひつぎ事をかたりし
あまぶりなり　日本紀に天狗をあまつ星と名く其疾如風其聲如雷震動
可畏なりも法書に元こうさを八かり妖怪まりて狐に訓ずべし
○東鑑に天狗霊託事源氏にてんぐこだまをいふ八魑魅ぞ或八老
驚ぞ化ぞ若くいふ和邦にこれ古来怪説多くこれをまた皇ぞ名ぞ知ぞ
ぞ訓ずべきて天狐ぞ物に出ぞ又狐に天狐地狐人狐の別ありて今ぞ天
狐ぞとより天狐也ぞ四谷類函に狐千歳與天通為天狐ぞ名ぞ台記に八
天公ぞ名ぞ名ぞ名ぞ獣ぞ名ぞ天狗ぞ名ぞ八かいぞ獣ぞまみと杜子美ぞ
天狗賦に上揚雲旗兮下列猛獣ぞいふ八三秦記に有天狗来下有賊則
天狗吠而護之ぞいふ若ぞ又五朝小説に我ぞ飛天夜叉ぞ地塔
上ぞ浮ぞて婦人ぞ拉む形梟鴟に似ぞ又廣西通志に一人約ぞ
長二丈面闊ぞ三尺餘長ぞ髪ぞ披髪鳥喙背に二翼ぞ二翼ぞ若
俗ぞいふ和ぞ名ぞ人夷語ぞ絶ぞ邦ぞ渡ぞ
又遊明録に王姥病死自朝至暮復甦云見一老挾將飛去見北斗君有

狗如獅子大深目伏井欄中云此天公狗也と天公の字ぞ据ぞ又ぞ州
掛川の近邑西方村龍雲寺に小僧に福天ぞいふ天狗ぞ名ぞ
請ぜ一祠に神ぞ祭ぞ永く山ぞ守護神ぞ名ぞ
尚吟味ぞ有ぞ数百年ぞ来ぞ事ぞ伝ぞ
ぞ名ぞ一社ぞ創造ぞ福天ぞ
拾ぞ出ぞ驛路ぞ
誦経ぞ食月餘已而得羽服成神仙ぞ
真ぞ遇ぞ我身中ぞ血肉遍体生奇毛ぞ身生両翼飛遊空中ぞ
注ぞ或人得道身生羽毛ぞ

あまつみやごと

中臣祓詞に天津宮事ぞいふ祭事ぞ
官事ぞ
ぞ
命掌其解除之太諄辞而宣之ぞ
あまれいぞ

日本紀に天磐船ぞ風雅集に

久方は天の岩船漕ませし神代乃浦や今はこゆらん野
是は饒速日命は故事こゆゑは社も推測ゑくし○七夕よりあ事記集
ゑてこそ○紙張磐船郡は磐の形舟なるゆゑ式は磐船神社なり
いはふねこぐ　神代紀は天吉葛とこそ云ふ葛とは藤の
事なりこれも云ふ
あまびこのかみ　琉球國の豊見城王城といふ両山は海神とかまりて神名とはな
ん海づくは祇そもは神は武姫へし琉球王祈雨は祈はよりある所
かくてもは民は雨は降りとあれば降るやはまつは神
琉球は大雨傍沱なりこそ琉球の塩平親雲上明和年間土地の大概小漂著
せし附の話に豊見城王城は豊玉彦は岩屋は宮は宮は宮

凡まろすとゝ以て張ハ散本集ニ

わたをうんとうめしてとハゝみのめふとまろぬ風の伝ふ

いろみはめとゝ以草ハ四十葉ともいふ○ものゝ名よりいふ古哥ニ

みるとなしあみのをひはひもなく人とをぬれらをふるる郷

○醤鰕をめゝとゝ以海虫ハ蝦ニ

まあみごとゝもいふ○ごとゝもいふ新撰字鏡ニ蟻字をまあろハ仏ハがゝ○

網の浦万葉集ニ見ゆ紀伊国ニ

網丁和名鈔ニ鵜足郡津野ハ

△あむ　虻と日本紀の奇ニ

あむせ　日本紀ニ沈をあむ湯ハみあゝ以見ゆ中山傳信録ニ洗

浴をあびるゝと譯ス

△あめ　天とゝ以神代紀ニ天とも見ゆ神名ハ首ニ

ニ見ゆ古事記ニあめとゝ以ハ註ニとゝ唱ふ註ハあめハ本

語あまの約ニ

とゝり神代口訣ニ聞く登とゝり自然ハ強て求めくゝ○

禁河の中ニ九宮とゝ訓を九天の中ニ黄帝九宮経ニ

乃てまろ中ニ河ニ万象ニ天ニ天水

ニ牛乳　水名本ニ有り蛇本ニ昇ニ

ゆ○大洋海ニハ

千萬年ニ雨亦無雲氣ともいふ○倭名鈔ニ鯨をあり

ゆとゝり今ハめけるとゝ呼マ或ハ嘉魚とゝり湖水ニ多ー○飴錫

とゝいふハ甘き氣ニ錫を

ゝあり八斛麥ニ錫ニ作るニ

書ニ含錫弄孫とゝ大学衍義ニ言而張

とゝり○あめうりとゝ

小竹管如今賣錫者所吹也

据ニ菊川飴ニ○丹鉛録ニ以飴浴金とゝ

俗ニあめとゝ以錫ニ作るとあめとゝ以須ハ豆汁ニ

伊勢ハ伊ノ字ハ篠（ヲ脱カ）巻ノ略ナリ　ヒロ字ハ尋ノ略ナリ　ヒロ字ハ尋ノ略ナリ

○海ヲ天ノ字ヲ用ヒルハ海ヲ食ベシ　○陪書ニ日本國王姓阿毎ト云ハ天ノ字ヲ近世韓人阿毎ヲ称スルモ此義ニ据ル

あめのたちくに　大殿祭ノ祝詞ニ天ノ血筋ト云ヒ筋ヲ侯人祿功臣僚天雨血漢哀建平年山陽湖陵雨血三日ト云ヒ又漢惠帝時晉惠帝時ヲ通鑑ニ云ヒシ一説ニ姑獲鳥ノ所為也ト云フ

あめのみちくち　神代紀ニ天柱ト云ヒシ叙邦ノ乃之表ヲ以テ代爲ル

○神名式大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社ノ祝詞ニ天乃御柱乃命國乃御柱乃命ト云フ神代紀ニ化竪天柱又以天柱举於天上也又磯馭盧嶋爲國中之柱又多巡國柱同會一面ト云ヒシ神号ナルベシ

△あまを　兒女子の語ニ餅ヲ云ヒ甘キ物ヲ○北廣ノ俗ニ米ヲ云ヒ

ヒヒ　ヒヒ

あまつ　万葉集ニ天ノ字ヲ用ヒルアマアリ　○また又もし○ハ

はく　天ノ字カグヒヒ云ヒシ天風祀ニ天上有山分而墮地一片爲伊豫國之天山一片爲大和國之香山ト云ヒ俗説伊豫ニ久米郡天山松山ト名ヒ松山ハ城ト勝山ト並ヒ式大和國十市郡天香山坐樹真命神社山の小乃禁ニ四方ヨメグリテ出中ハ平ナリニ香山耳成山畝火山各獨リ立テ鼎足のごとくなるニ藤原氏ノ祖ハ香山ヘヨリたりシテ耳成畝火ハ天ヘヒロ香山ヘ入ルヒロ香山ヘ入ルヒロ香山ヘ入ル

とう延喜殿正式に凡綾ハ五位以上は朝服に用ひるものとゆるす六位以下は
服用を禁ずとあり今武家は制も是に按ずるに蜀江錦呉郡綾と
いふ○機具にはやといふ物はりは経糸を掛るを立へと綜とへとあるを
といふ玉篇に撲縷持糸交者也とあり○綾弓ハ崇徳院讃岐播磨に時
阿野郡廳弥大夫高遠の家に留して其女と幸し名けらる一皇子をもうけ是を
林弥太郎殿と称す

あやー　奇字異字をあやしいはやと嘆ずる詞なり○あやしたぐなくいい
やしけ多くともいふ○神代紀に神もあり
あやを　うつかり結ぶおのぶたぶさけちをーいやーそこそこゆはゆると思ーや
すゑゆゑて古事談に血あゆとそこそこ
あやめ　物のあやめるーいろ文理は彩色写は織り世にはあやハ錦はりあと
ちーめて長のかゝ見はかーまて文ちさものハかーあみめさねめぬはめはとまり
いろうーはえはわるおくとはいとて源氏にもいろしこをあやめとつくしとある
奇に多く菖蒲にはやせとう○淫女とあるハ淫ろあまる女なりあやもとはは

めーー万葉集にはつらの淫女とすゆてぬくるあそこそこそこそこう○菖蒲ハ負親
儀式に漢女草とはこそこうもあ表青裏紅梅とこそこう○
五月五日はあやめ草とはは慈鉢縣志に端午懸菖蒲艾虎如楚俗記こそこう
○はやめはかづらハ續日本紀に普著五日之節常用菖蒲為縵こそこう○
あやめのこーハ雲圖抄に見はあやめ日菖蒲を挿て禁中にもあるとあ
顕昭こそこう又あやめは車にもなるとこそこう六衛府にこう弧にもとて六のつかさも
かゝてこーこんなこうあり○西宮記に五月菖蒲机四脚こんゆ○あやめは松
東鑑に見はゆ鏤金銀とこそこう新撰人こうもこーこ中の事に見こそこう○菖
蒲は根をもとぐすはかこそ造りこそこの新古今集に見こそこう西土は艾虎の
ぬーー駒のまこめぬ物をうーー拾遺集にこうはこそこう○菖蒲やめハ溪蓀也
こそこう今俗にこうこをあやめこそびは絶句とあて菖蒲なくいひ雋はやや
めと菖蒲は音とこうこう○砂石集に故鎌倉右大将家ゆこう菖蒲とはいち
さとは天人なりうこを右下ーー法ーーをまこうこを梶原三郎兵衛尉に賜こうは
まこをあはこうはぬこそこそこう金てこそこはやあとこそこそはらか

こゝろの事とをやり沙石集に無住法師の泥中の三尊兵衛尉八其兄景茂あれい
世よい事を深秘沙ぬえを射し黄女菖蒲ぶを揚りしこの夫法ありと
いり伊豆加茂郡河内山の蓮とゆしいはやめさまよ尼よりて伝ふ〇
を據りし大著聞に河内山を仲綱の駿馬なりもいり
あやり　万葉集にあやよ悲しきはやよ恵しきこゝろ尼さうりはやは文紫式
えといそ手嘆くこゝろ事をいとくはやなくいりも同家物語へ後宮
り泥める浪いかく
あやゆく　盛衰記にはやゆくはり新撰字鏡に喧字をあり杜詩に生憎
柳絮白於綿遊仙窟に可憎病鶯夜半驚人この生憎可憎とはやゆくもあな
ゆくもよ先り新拾遺集
ほとゝぎすはやゆくはやゆくふるさとの初音なりけん
あやはり　後日本紀に挑文師をあり後れ枝を挑取るとめく今はやどり
いふ花木にも見こゝり明律に機戸及桃花挑花工匠とこゝり〇古事紀文
選なした機をあり右れ家より今はやはりもどるあとふれあり

涅槃経にも幻主機関木人やこゝり又弄丸の事を作るはやあり
後撰に家より出こゝり
あやかる　肖借れ家の霊験に肖をあり作るはやかりこのかゝも
いり拾遺集
風をあらみ波のうへにこぎ出でゝ人にあやかりてあるかな
あやかり　作る事實明白なるこゝろをはやかりなこゝりはやかるこ同家物語
〇船辨慶に諸はしれ知はやかりぶつそひとはやはやまそ舟はやかり
いふ魚ゝつけい必を覆すといふ小判鮫の事こゝりはり頭に小判金れ象はふ
魚ゝり坤輿萬國圖にはの咽機那魚こゝもはり咽機那ハ蛮語なるへ或ハ
博山魚こゝもはり貝原氏の書にあるこゝれこゝも魚ハ舟楽れ家ゆ
あやめ　作る人とはやめゝ又あやあるなこゝはりはやめんこゝあるも同
めゝ及むこ綾こ禍とをせ事沛代紀にこゝりこれハ禍れこゝめへ
新機を作り
白髪を表こゝ人こゝこゝを作るたくひ状あやあこゝする

淨衰渥川欽合り

あやまつ　人もろこしてもいかくそんをはひまつべき袂なりと移り

あやまち　謬誤とよめりまろ及びとよとを重ねて新撰字鏡に謬をあやまちはとよめり

あやまち　過字徳字等とよめりまろ及びあやまちを重ねて神代紀に誤もあやまちはとよめり

新撰字鏡に註も誌もよめり○犯過の罪ハ知て為の悪を犯とゝ及覚して為れ罪を過といハ律れ法し

△あゆ　年魚といふ日本紀に細鱗魚ともゝ愛をへき魚あゆを名つけたりや尾張愛智郡相摸愛甲郡等にもあゆとよめり南産志にハ溪鰮こといふ○年魚の泥鰌（ドジョウ）に化せしと親しく見し人ハ○俗に鮎とよむハ和名鈔に名り鮎ハ年魚とも神功皇后ハ年魚とをとをとをまりりとふるりといふ○ゆまとゝ長せさる時に網を張て杓をて掬を汲鮎を名くあゆごまるはゆハ春くさびはゆ為あゆハ秋く三月に海より出るはゆごハ別物し○こがゝはゆハ秋をるをとに出てちひさきをいふ○延喜式に氷魚年魚

煮乾年魚押年魚凡くさう白干鮎類聚雑要に見て江次第に煮堅鮎もとゆ

押ハ堅押といふ○万葉集橘の奇ふはゆを痛くとゝめハ左風といふ

あゆふ　万葉集橘の奇ふはゆを実ハ熟ぬをとゝめ吏ふを如へしと

いふり枕草紙に汗あゆるといふハ流るくをとゝめる血はゆ血をはやかをとゝもゝ

出字をとめり又金葉集りはゆを中ふをなりを人をかりて

もいふり馬れ内侍の奇ふいしを中ふれ歴れ石をれなりふかりあゆるまてゝれ

あゆぐ　ゆるぐ揺こといふり初のをとはなりふかりあゆるまてゝれ

とゝみ又はゆがをとゝめりがをを及くゝ千載集り

おゝひかゝはくがれ如てゆくゝ乃はゆぐ等を振をゝぐく

あゆひ　日本紀に脚帯とゝみ又はゆひもゝあり万葉集に足結とかゝり

西宮抄に足纏とゝゝしを見るゝ鈴もつけるゝ古事記に多ゝ

ひの小鈴をゝ○西土に纏脚といふ宋ゝして貴女娼妓ハ幼より

足を溪ひ縶約して長大ならもあるといふり

△いよ　出雲風土記に目一鬼来食稲之男所食男云動々故云阿欲と云てより
今あるそあらうといふ〻出雲〇宇治拾遺に鬼はいよひかりぬと云ふ
いのみとかうよめへ〻

△あらし　麁字暴字等とよむ荒名なり〇嵐とよむ山ちと韻を
も暴風は荒山颪のいたしの類なれ共山ちと同語なへ〻と云
万葉集に下風を云〻とあるはあらし〻と云同〻孫愐云嵐山下出風也
云て山下ともかけりまた荒風を云風なともよめり飄ともよめり玉篇に大風
也と注せるそこうかゆ結よいたしの風ともゑ云〻〇草菴集に
附のろ嵐そさそ日報八てはあも嵐も嵐〻あ荒と
國語の後善如登後悪如崩の教戒に同〻〇古俗
杉浮てもあゆるれさそ山嵐のいたしとそそれ
安不忠危の教戒なへ〻〇文選註に嵐山風也と云〻こうしへ山風と
いたしまいふんのなつく而云〻と云り〇海よいたしとよまれり荒と
万葉集に大海よいたしを吹そと云海よいたしと此面あはもよめり千

五百番歌合の吹風もいたしとよめりとを判者雅也られあり此
歌に君同やくとまろ風の今はいたしとなるそかすのき
とこ云〻こうれは雅おかる歌〻とこの云〻
あらし　新撰字鏡和名鈔に霰をよめり遥散此義をとそ名ゑ云〻と云
こうれをひやうとの云氷雨の音なへ〻陸詩に説に霰氷雨也と云〻〇
緻密の文字の云は三条西家抄に小石疊号之霰也と云ゆ〇寒く昊云〻と
特霰也と云り山居雜録に煎切餐粢為乾脯鍋煙則翻動如霰霰之状故名
と云〻こうの二言集り
拂つむいたるの類〻こうちのくはいよいたしと云〻
〇歌字日本紀に云〻とあり又歌云云とけぬとあり是は荒けぬ
云云と云〻こうも杉系本に云云ぬへ〻
あらび　祝詞式に云〻神代紀に荒芒とよめりいたしぶるに同〻ぶる友び
なり又根國底國より康び疎び来ん坊ふと云りて黄泉の汚垢に

アヒ恋しき事ハ根ざし絶るも覩べしとぞ

あらこさ　荒木ハ生れまくなるとゆふ故べしまこと所の名ゟ荒木新墾ゟと

かゝり新墾れ出たるゝ所ゟ荒木の小田とゝあり和名抄ゟ原木

とゝあるハ是ゝとゝ同じ意歟ゟ荒木ゟ荒蘿ゟあり○荒木弓東

鑑ゟ見ゆ万葉集ゟ荒ゟ荒ゟ

須智荒木神社風土記ゟ荒木山有神号須智明神所祭猿田彦武内宿祢

葛城襲津彦也とゝ

とゝ蛮語ゟ○群芳譜ゟ薔薇露も番名阿刺吉とゝ薔薇

酒ゟ酒ゟ酒ゟ

あらぎ　日本紀に蘭をよみ和名抄に蘭蕙をよめり荒に葱に充て蘭
葱をよめり大膳式に蘭幾把とせり也なり又山蘭とよぶ也とこれ
推馬樂にもあれそとよめる是なるべし○新撰字鏡に蘇を荒らぎと
えり○倭名鈔に辛夷をやまらぎと訓せり其香をよめり今も本
襲にもよめり○齋宮に長菖蒲に堰をあらぎ　阿蘭若に堰をあらぎ
薑に負九輪にあらぎ　仏にあらぎを供ずるなり○東やひんがし蘭やあらぎ紀の俗語八をとり取はたら
神と西土にも闌を東門とよび事なり東東相なるべし○舞うたら
きとよめ八倭名鈔道調曲に数人三臺とよめ是也とり醉郷日月に三臺
曲八唐の則天作とあり○信列本曾にあらぎ料なり辛夷に多き他
なり伊勢に南方柚の条に内にあらぎを生室なり神木によめ伽羅木なるべし
あらぎみ　霊異記に炭をよめり又炭を刑せり今烏石とよぶ晉豫讓の呑
て啞しるを見る○延喜式に荒炭和炭なり是八今の堅炭焼炭な
るべし○新撰字鏡に簪をあらぎみとよめり炭簪と注せり

あらぎめ　紀に荒海と云一入海の荒きを日本紀に桃源布とよび万
葉集に桃花褐とせり海ら荒とつけり是也延喜式に退紅をもよめり霊
異記に紅闌袈裟今之桃花裳也とよめり
あらかじめ　日本紀に豫定とよめり古へ八反々也まへかねて譯
す豫八素定也と註せり預も同し逆をもちむ先事預度之也と注す宿
をもむ八風と也ず早也とよめり
あらみがを　日本紀に明神をよめり續日本紀に現御神とかけり神賀詔
に明御神とよめり万葉集に明津神吾皇とよめり宣命に視神止
大八洲國所知須とよめり
あらみたま　神功紀に荒魂和魂とよめり荒魂者静而荒魂者皆墨依給とよめり○内宮儀式帳
紀に大神之和魂者静而荒魂者皆墨依給とよめり
に荒祭宮称太神荒魂宮とよめり
あられぶり　蹈歌をよめり持統紀に宣命譜をあられぶりとよめり
と公事根源に云ふ男蹈歌八正月十四日女蹈歌八十六日に聖武紀に

天平元年同十四年ゟ此事ゟり釋日本紀ゟ此歌曲之終必重稱万年阿良礼今阪云萬歳樂と云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ音便也とゝ云ゝ四時調攝殘ゟ唐觀燈士人作踏歌唱之歌曰長安少女踏春陽云々踏歌ハ字ハ蹈ゟ踏歌章曲女踏歌章曲具ゟ朝野群載ゟ見ゆ年中行事歌合ゟ云かる源氏ハ物語ゟ男踏歌ハ事と打ゟ云ゝ中ゟり大ゟ歌の為安ハ変ゟ

ゟ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ

西土此書ハ苟頭といふ筋此はの脈にあるゑ方よりまり合てきつてきつ
遠ゐるゑ紀をもそそくといふ何氏兵録ハ鉄砲此あり此ほそ伐馬蹄筒と
いふをもとといふ
ありかと　日本紀ハ鼎甑をもあり又行りかをもるもえり假名本りハ
織甄と書りあとおとゑすゑ例ゐりゐ
ありぐぬ　古事記萬葉集ハ神中ゐり織絡とといふ新衣ゑとと
いふ又万葉集此瑞衣をもちのとみてゐりぐぬ此寶をも注けまハ瑞衣
かぐもゐ衣ゑへしもいふをゐ瑞衣とよゑゑハ紀ゐ
ありゐゐ　ゑ此ゐ十六夜此下ハ歌已ハ此ゐ屋ハ紀ゐてゑる
いかゐ或ハ晨明をゑり
ゐとをすゐゐかをゐゐ見たてゑ此の屋ゐ此をゐ
此ゐ採菊東籬下悠然見南山此風味ハ和ゐ○ゑ此の池ハ伊勢ゐ
ゑ氣祢齋宮村ゐゐ此此ゐ紀ゐ安曇郡ゐ又對馬ゐゐ此ゐ朝鮮
とゑゐとへし富山浦ハ至ゐ四十八里ゐゐ

あとゑ海　日本紀ハ消息又狀字文選ハ景跡遊仙窟ハ行跡東遊ハ形勢
とゑゐ下学集ハ谷野ハ谷紀此をしとゐりゐみハ摩訶止観ハゐて文選ハ
列宿分其野ゑゐ
ありぐゐ　和泉此ゐ堺西此紀ゐ枕草紙ハ此事ゐ悉く載ゐ
ゑ此ゐハ代醉編ハ載ゐ小説の孔子得九曲珠欲穿不得遇二女教以
塗脂於線使蟻通馬と祿寶經ハいふゐ葉老國此故事と併せて傳會也
ゐとゑ此ゐ紀ゐ紀ハ此ゐ紀ゐ此ゐ紀ゐ此ゐ紀ゐ
かをゐとゐあゐゐもゐぬ此ゐゐとゐ此ゐへし
大鏡故事後ゐ此ゐゐゐ○此此ゐ此ハ花鏡ハゐ虎刺也とゐゐ
大葉小葉此二紀ゐゐ
ありゐ此ひ　有無日ゐ此此此ゐ此ゐ此ハ村ゐ此此此國ゐ此廢日ゐ
此ゐゐ此此此此ハ此此此此

ありあるしがを　朝鮮ハ鴨緑江といふ　ハ鴨緑の音ハ江ハ美川ハ韓語し
かつて京ハ川の和源を加へてとりあり　和泉式ア
　ひとさとし　君をこそ　ん　ものあやなりあれ川の石をつくしも
神功皇后紀乃誓約をなりひしせあり　ひしせ　ひしせ
ありけるとこそ　蟻ハ門渡ハ　ハ　ハ　

とんとこうり全術兵制なれとも釋せり○倭名抄なる麵麥粉也俗云餅粉阿禮
是也とあり○孫八ろく津とあるとこいふも古語なり○靈異記なる慌とかきてとよめり
あるとます　神代紀なる所生又生字をよめり左坐のかくし古事記なる阿礼坐とあり
又うまれしうまなりし皇代紀なる産とかきしまたとよめるも同し
あれいでるなり　源氏なるあめ万葉集なる彼ハ誰時とよめるあしたの異なるなり
△あろ
△あと　沫と日本紀和名鈔なる阿和とせり雨九れ多くへし古事記の
所なる阿波とあり万葉集なる雪ハ安幡なるそそとあり沫ハ
泡なるへしとあり靈異記なる漚を阿波とせり○采女記なるはこぶなるとみす
なりてといふなり
あろう　新撰字鏡なる惶急とあり
あろそろ　日本紀なる急字遽字惋字とあり文選なる周章とよみあるとなり
ともとの沫立のことを物則せるなへし
あるとゆく　日本紀なる沫雪とよめり釋なる其弱如氷沫とあり

とかくとあり万葉集なる沫なるたゆたひとあり雪とよめり
ま沫なる仏なる○源氏なるもあるとよめり
しとけとかくへし神代紀なる蹈堅庭而陷股若沫雪以蹶散とあり
大日經なる一切法不堅如聚沫故とあり○一説なる雪ハ初て形してあるを
花とあるなり粒なりとして水沫のあく結へるとして沫雪といひ
ゆへし古事記なる檳榔とあるを沫とよめりそ沫を
なる音ハさやげといふさゝぶ已今ハさゝとあるとかけるとかけ
ともあるさゝとし説文なる霰稷雪也言雪初作未作華圓如稷粒也とあり
あるとつげなる古今集なる沫雪ハたまれハかてにぬけつゝあるとも
同し○あるゆくなる万葉集なる紫参也とあり
△あゐ　藍なる紫草なるなるなるな

駿河より頼朝に富士野の狩よまつ はりねに狩せり義久り中納言
家より伊もとり斬らる

あるよりもこれ　荀子に青出之藍而青於藍とえたり西の事り

ものとよりもこれ杜鵑あるもこれ変化なるる

〇ほ　足音はあるもあれおとよりあり後も行り新撰字源に跳を行形
おとよりあり行嚮なるもこれ今行はかるの行或は跛とよめり

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan